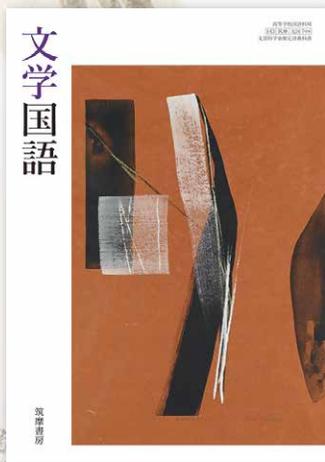


国語教科書のご案内

筑摩書房版

内容解説資料



文国708 | 文学国語



論国710 | 論理国語

奥深い知性と、
豊かな想像力を育む



古探715 | 古典探究
(古文編)



古探716 | 古典探究
(漢文編)

令和七年度用

'25

◆目次◆

- 筑摩書房の国語教科書 ———— ②
- 『論理国語』のご案内 ———— ④
- 『文学国語』のご案内 ———— ③④
- 『古典探究』のご案内 ———— ⑥②
- 入試出題状況一覧 ———— ⑨⑩
- 指導資料・教材一覧 ———— ⑨②

「論理国語」「文学国語」「古典探究」の内容は、こちらのパンフレットにまとめました。

筑摩書房の国語教科書

編集委員のことば



東京大学 安藤 宏

二〇一八年に改訂された新学習指導要領で、必修科目は「現代の国語」と「言語文化」に、選択科目は「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」に分かれました。このうち「論理国語」は評論や実用文を扱い、「文学国語」は小説などの文学教材を扱うことになっています。各四単位なので両方を履修することには困難が予想され、「古典探究」も含め、教室で文学教材をどう扱うべきか、教育現場に不安と困惑が広がっています。

現在、情報化社会の中で「実用国語」化への動きが急速に進んでおり、今回の指導要領はあきらかにこうした流れに沿って作成されています。世にある文章を「論理」「実用」「文学」の三つに区分して科目に分けるという発想も、まさしくこれに深く関連する動きと言えるでしょう。

しかしわれわれ筑摩書房の編集委員会は、「役に立つ」という概念をもっと根本的な所から捉え直したいと考えています。世界の成り立ちを根源から問い返し、異質な世界や他者への想像力を育んでいく「人文知」は「国語」という教科の礎（いしずえ）をなすものです。こうした発想に立ち、「論理国語」と「文学国語」の二つの科目が相互に有機的なつながりをもって編集され、これまで培われてきた理念とあらたな時代への要請とが、高い次元でミックスされています。

情報化社会の中でこそ、功利的なものの方に見方に惑わされることなく、これを批判的に相対化していく力が求められるわけで、われわれは教材の選定や編集に当たって、まず何よりもこうした奥深い知性を養成していくことを目標に掲げました。ぜひわれわれの編集方針にご賛同を頂ければ幸いです。

新学習指導要領と筑摩書房の教科書

①すべての教科において「主体的・対話的で深い学び」が求められています。

【筑摩書房の教科書では】

- ・生徒が主体的に取り組めるよう、知的好奇心を刺激する教材を厳選しました。
- ・「学習の手引き」には、生徒の主体性を引き出したり、対話によって考えを深めたりすることができる課題を配しました。
- ・単元ごとに「実践」を設け、生徒の主体的・対話的で深い学びを導く工夫を例示しています。
- ・さまざまな角度からの比べ読み教材を掲載して、深い学びへと誘います。

②「思考力、判断力、表現力等」と「知識・技能」から成る「資質・能力」の育成が求められています。

【筑摩書房の教科書では】

- ・『現代の国語』『言語文化』『論理国語』『文学国語』『古典探究』ともに、収録された教材と、学習指導要領に示された「思考力・判断力・表現力」および「知識・技能」の項目との関係が一目でわかる一覧表を掲載しました。
- ・それぞれの単元で、どのような「資質・能力」を身につけたいかを示す「単元の目標」を掲示しました。
- ・各教材の冒頭に「視点」を設け、教材のどのような点に着目して学びたいかを示しました。

『言語文化』「この教科書で育成する資質・能力」

言語文化		現代の国語		1年次
<ul style="list-style-type: none"> ・「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目」 ・「書くこと」「読むこと」の2領域。 ・「読むこと」の教材は「古文」「漢文」および小説・詩歌などの「近代以降の我が国の伝統と文化に関する文章」。 		<ul style="list-style-type: none"> ・「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力」を育成する科目。 ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域。 ・「読むこと」の教材は現代の社会生活に必要な論理的な文章および実用的な文章」。 		2・3年次
古典探究	文学国語	論理国語	<ul style="list-style-type: none"> ・主として「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面を育成する。深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視した選択科目。 ・「読むこと」「書くこと」の2領域。 ・「読むこと」の教材は「近代以降の文学的な文章」。 ・主として「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面を育成する。深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視した選択科目。 ・「読むこと」「書くこと」の2領域。 ・教材は主として古典としての古文及び漢文。 	

※このほか「国語表現」（他者とのコミュニケーションの側面を育成する科目として、実社会において必要となる、他者との多様な関わりの中で伝え合う資質・能力の育成を重視して新設した選択科目）があります。

論理国語

重厚な定番から、最新のテーマや注目の著者まで、
精選した評論をそろえ、難関大学の入試にも対応する
「論理国語」の最高峰。



日本大学 紅野謙介

編集委員のことば

私たちは、子どものころから、感想を述べよとか、意見を出しなさいとか、くりかえし指示されてきました。しかし、ほつりほつりとうまく言葉が絞り出せず、もっと分かりやすくとか、明確にとか注文をつけられたりします。大人になると、もっとそういう場面が増えてきます。ある商品について、それがいかに素晴らしい、美容と健康によく、地球に配慮して作られているかとか、このプロジェクトを実現するといかに人類に貢献し、持続可能な社会を生み出せるかを説明してたくさん予算を獲得するとか、そういう説得の戦術に大人は頭を悩ませていきます。

そのとき効果を発揮するのが、論理とレトリックです。とりわけ論理的に言葉を練り出すことを目指したい。でも、ほんとうに完べきな論理というのはいくらでも出るのでしょいか。言葉は論理的にはなることができますが、純粋な論理そのものにはなりません。議論で相手を徹底して打ち負かすと、負けた側には不快な感情のしこりが残ります。

では、どうしたら社会で役に立つ「論理国語」ができていくのでしょうか。それにはまず相手に納得してもらおう言葉の使い方を学ぶことです。そのためには相手がどのような人なのか、どのような抱えているかを想像することが必要です。他人ですから、真に分かることはむずかしい。言葉を練り出し、相手の言葉や反応を引き出すことによって、少しずつ違いが分かるようになればうれしい。「論理国語」はこうして最終的には対話の言葉に向かいます。書き手と読み手が、話し手と聞き手がその役割を交互に切り替えながら、さまざまな観点から人間を、社会や自然をどうとらえ、どのように生きていくかを対話していくのです。

論理国語 (論国 710) 編集のポイント

●論理的な思考を学ぶとともに、ことばと人間の本質を深く探究する文章を豊富に採録。

●大学入試にも対応する鋭い視点や抽象度の高い思考を身につける、質・量ともに最高峰の評論をそろえました。

《教材の特徴》

- ①第一部9単元26教材、第二部8単元23教材と充実のラインナップ。
- ②原則として各単元内の教材配列は易→難へ。
- ③長く読み継がれる名評論から、最新のテーマ、さらに翻訳評論や近代の評論など、筆者、時代、テーマすべてにわたってバラエティ豊かな教材。
- ④教室や生徒によってさまざまな資質・能力を引き出せる奥の深い教材を厳選。

《授業を支える工夫》

- ①「第一部」「第二部」の冒頭に学びの見通しを立てるために役立つ「単元の目標」と教材ごとの「視点」を提示。
- ②教材ごとに学びの目標を明確化する「課題」と、理解を深める「構成」「読解」、主体的な学びを支える「言語活動」を提示。
- ③教材ごとに評論に用いられることばを身につける「キーワード」を掲載。
- ④主体的な学びを支える「実践」を適宜掲載。
- ⑤「論理的思考」を身につけるにあたって必要な知識を示したコラムを適宜掲載。
- ⑥「言語活動」で小説などとの関連付けを適宜提示。

論理国語 編集委員

- 安藤 宏 東京大学
- 門屋 敦 東大寺学園中・高等学校
- 紅野謙介 日本大学
- 河野龍也 東京大学
- 五味洵典嗣 早稲田大学
- 清水良典 愛知淑徳大学
- 関口隆一 筑波大学附属駒場中・高等学校
- 橘 直弥 灘中学校・高等学校
- 仲島ひとみ 国際基督教大学高等学校
- 服部徹也 東洋大学
- 松田顕子 立教新座中学校・高等学校
- 吉田 光 東京都立竹早高等学校

論理国語

目次

●教材数は第一部9単元26本。
 ●基本的に章ごとの教材は、易↓難へ。
 ●「書くこと」「読むこと」のアイコンで、どの領域の
 「資質・能力」を養うのに適した教材かが一目瞭然。

目次 論国710
 A5判・448ページ

単元の目標……………10

第一部 目次

第1章…読む 架橋することば 長田 弘……………12

アイオワの玉葱……………12

新 一〇〇パーセントは正しくない科学 更科 功……………20

物語るといふ欲望 内田 樹……………30

◇評論入門 一……………38

第2章…読む 日常の中の論点

新 ファッションの現象学 河野哲也……………40

新 地図の想像力 若林幹夫……………49

新 本当は怖い「前提」の話 川添 愛……………56

◇評論入門 二……………66

第3章…書く 〈私〉のいる場所

新 近代の成立——遠近法 橋爪大三郎……………68

新 沖縄戦を聞く 岸 政彦……………76

新 数字化される世界 オリヴィエ・レイ……………85

◇論証の作法……………92

第5章…読む 歴史に向き合う

新 異時代人の目 若桑みどり……………126

新 莊子 湯川秀樹……………132

新 日本の社会は農業社会か 網野善彦……………141

羅針盤①……………149

第4章…読む 変貌する時代、変貌する人間

新 人新世における人間 吉川浩満……………102

定番 現代日本の開化 夏目漱石……………111

変貌する聖女 川島慶子……………118

新 実践①…多様な文章に触れよう——法令文・新聞記事……………93

〈参考〉憲法の力を生かすには 木村草太……………95

「論理的思考」を身につけるにあたって
 必要な知識をまとめたコラム。

参考資料

「物語るといふ欲望」「現代日本の開化」「清光館哀史」「物語としての自己」の各教材については、「言語活動」と関連して読解させたい小説作品を『ちくま文学講読 上級編』から抜粋し、link から表示できるようにしました。

主体的な学びを助けるアクティブ・ラーニング例としての「実践」。

実践②…レポートを書こう……………200

第7章…書く 〈伝統〉を見つめ直す

模倣と「なぞり」 尼ヶ崎彬……………174

桜が創った「日本」 佐藤俊樹……………182

定番 清光館哀史 柳田國男……………189

第6章…読む 世界を視る位置

ファンタジー・ワールドの誕生 今福龍太……………150

生物の作る環境 日高敏隆……………159

貧困は自己責任なのか 湯浅 誠……………167

◇データの読み方……………173

第8章…読む 現代という課題

新 男の絆、女たちの沈黙 尹雄大……………202

新 トリアージ社会 船木 亨……………212

権力とは何か 杉田 敦……………220

第9章…読む 〈私〉をひらくために

新 ビッグデータ時代の「生」の技法 柴田邦臣……………228

「である」ことと「すること」 丸山眞男……………236

実践③…資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう……………250

新 〈参考〉読書とはツツコム事と見つけたら 山本貴光……………252

読書案内 学びを広げる……………256

最新のテーマから定番の評論まで幅広く網羅。

論理国語

目次

●第二部の教材数は8単元23本。

第一部 目次

単元の目標……………258

第1章…読む 多様性のほうへ……………260

 ビジンという生き方 管啓次郎……………260

 「自然を守る」ということ 森岡止博……………267

 虚ろなまなざし 岡 真理……………274

第2章…書く 抽象から具体へ……………282

 物語と歴史のあいだ 野家啓一……………282

 貨幣共同体 岩井克人……………289

 ぼくらの民主主義なんだぜ 高橋源一郎……………298

第4章…読む 語りと世界……………332

 ことばへの問い 熊野純彦……………332

 物語としての自己 野口裕一……………338

 ポピュリズムとは何か 森本あんり……………346

 羅針盤②…物語の中の論理……………353

実践④…自分の経験や考えを効果的に書いてみよう……………304

第5章…書く 「当たり前」を疑う……………354

 新 思考の誕生 蓮實重彦……………354

 新 絵画の二十世紀 前田英樹……………360

 定番 日本文化私観 坂口安吾……………370

第3章…読む 可視化する力……………306

 つながりと秩序 北田暁大……………306

 新 真実の百面相 大森荘蔵……………314

 新 死の恐怖について エリザベス・キューブラー・ロス……………322
 鈴木 晶 訳

第6章…読む 「近代」を再読する……………378

 新 主義は広大なるべき事 福沢諭吉……………378

 自由の説―「東洋自由新聞」第一号社説 中江兆民……………384

 新 何のための「自由」か 仲正昌樹……………389

 羅針盤③…先人の文章から学ぶ……………396

実践⑤…複数の主張を比較してみよう―多角的読書のすすめ……………397

第7章…読む 記号がつくる世界……………398

 ものごと 木村 敏……………398

 新 「病氣」の向こう側 田中祐理子……………407

 新 過剰性と稀少性 佐伯啓思……………418

第8章…読む よみがえる問い……………428

 記憶の満天 西谷 修……………428

 戦争と平和についての観察 中井久夫……………436

実践⑥…論文を読んで、これまで行われてきた研究をまとめよう……………446

読書案内 より深く問うために……………447

近代の評論、翻訳の評論など、バラエティ豊かな教材。

大学入試にも対応した歯ごたえのある評論。

《内はキーワード》



第1章 アイオワの玉葱―長田 弘

◆言語論《母語と母国語》3000字

言葉は単なる道具ではなく、思考や感情を作り出す枠組みそのものでもある。母語と外国語を比較する中で見えてくるものとは。自分と自文化を自明視せず、己を客観的に見つめ直すきっかけとなる教材。



第1章 一〇〇〇は正しくない科学―更科 功

◆論理学《仮説と検証》4400字

科学的推論は決して「一〇〇〇」の正しさには到達できない。それは、「演繹」ではなく「推測」によって未知の真理に迫ろうとする科学の本質ゆえなのだ。科学と、その営みを支える論理的思考の基礎をわかりやすく解説する。



第1章 物語るといふ欲望―内田 樹

◆物語論《テキスト》3300字

私たちはなぜ「物語る」のか。「解釈したい」という欲望はなぜ生まれるのか。人間の根源的な欲求の仕組みを、筆者一流の逆説を用いて鮮やかに解き明かすスリリングな評論教材。



第2章 ファッションの現象学―河野哲也

◆文化論《差異》3800字

「変化のための変化」であることによって秩序を翻弄する遊戯であると同時に、新たな自己を創出してよりよく生きるための試みでもある、奥深い表面とファッションの謎に迫る、重厚な文化論。



第2章 地図の想像力―若林幹夫

◆情報論《近代》2800字

中世と近代の地図の比較によって「科学的」であることが「進んでいる」という考え方を反転させ、西洋中心主義が「当たり前」になっている現代人の思考を問い直す。



第2章 本当は怖い「前提」の話―川添 愛

◆論理学《前提と推論》4400字

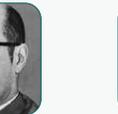
「前提」の「怖さ」とは一体何か。言語学の知見を通して、何げなく使われる「前提」という概念を捉えなおす。



第5章 異時代人の目―若桑みどり

◆歴史論《パラダイム》2500字

歴史学の役割とは、過去という膨大な時間の堆積を「異時代人の目」をもっと整理し、埋没してしまった「真理」を照らし出すこと――人間の「知性」への希望と、次世代への痛切な責任を語った教材。



第5章 荘子―湯川秀樹

◆古典論《寓意》4100字

古典が原子物理学の世界を考えるヒントになっていたと筆者は言う。古典の意義はどこにあるのか、歴史を経た叡智がさまざまな解釈によって甦ることを学びたい。



第5章 日本の社会は農業社会か―網野善彦

◆歴史論《イデオロギー》3600字

新たな資料との出会いによって、積年の思い込みの呪縛が解かれることもある。歴史を見直す面白さがそこにある。



第6章 ファンタジー・ワールドの誕生―今福龍太

◆文化人類学《ツーリズム》4000字

「観光」という行為に秘められた、グロテスクな権力の形とは。差別を強化し、再生産する仕組みを身近な題材を例に暴き出す、グローバル時代に必読の教材。



第6章 生物の作る環境―日高敏隆

◆生物学《環世界》2800字

世界とはそれぞれの生物が持つ感覚器官と行動原理を通じて立ち現れるものであり、DNAとイヌとヒトとは、「世界」の形は全く異なる。所与のものを自明視せず、世界の別ありようを想像する力を養うために。



第6章 貧困は自己責任なのか―湯浅 誠

◆貧困論《格差社会》2500字

「貧困」の定義とは何か。引用の中の語句を解釈しながら自説を組み立てる論法にも留意したい。



第7章 模倣と「なぞり」―尼ヶ崎 彬

◆身体論《身体》3700字

日本の芸事における習得のあり方を題材に、意識と身体とのつながりについて日本人はどのように捉え、実践してきたかを考察した文章。



第3章 近代の成立―遠近法―橋爪大三郎

◆近代論《主体》3100字

「遠近法」という、美術の授業で必ず習う身近なテーマを通して、「近代」の特性を簡潔明快に解き明かす。



第3章 沖縄戦を聞く―岸 政彦

◆社会学《オール・ヒストリー》3800字

「聞く」力とはどのようなものか。沖縄の人々のことばに耳を傾け、その語りを書き記し続けた筆者の文章を通じて、「聞くこと」と「書くこと」との密接なつながりを実感する。



第3章 数字化される世界―オリヴィエ・レイ

◆統計論《自己定量化》3200字

私たちに示される「統計」とは果たして「真実」なのか。数字だとい信用してしまいがちな私たちの認識の死角について考える。



第4章 人新世における人間―吉川浩満

◆社会学《SDGs》4600字

新しいことばの発明によって、世界の見え方が変わることがある。「人新世」という語が提示する視点について、筆者の主張を読み取る。



第4章 現代日本の開化―夏目漱石

◆近代論《日本と近代》3600字

明治を代表する知識人は、自らの生きた時代をどう見ていたか。聴衆を前にした講演ならではのレトリックにも注目したい。



第4章 変貌する聖女―川島慶子

◆ジェンダー論《フェミニズム》3800字

キエリー夫人の伝記がそれぞれの時代の社会的な要請や女性観の変遷の中でいかに書き換えられてきたのか。



第7章 桜が創った「日本」―佐藤俊樹

◆歴史論《構築主義》2700字

「環境」とは何か。日本における桜と人間との関係について「人工／自然」に注目し、視点を反転させる論理をつかみたい。



第7章 清光館哀史―柳田國男

◆民俗学《民俗学》6300字

民俗学の大家、柳田國男は、旅の中で何を感じ、「記憶」をどのように「記録」したのか。新聞に掲載された文章を教材化した、筑摩書房伝統の定番教材。



第8章 男の絆、女たちの沈黙―尹 雄大

◆ジェンダー論《ジェンダー》4900字

男性の書き手によるジェンダー論。固定的な物の見方が固定的な関係をつくる。その事実をどのように乗り越えられるか、問題提起する。



第8章 トリアージ社会―船木 亨

◆社会学《生権力》3700字

最近とみに耳にする「トリアージ」。新しいことばが定着するとき、そのことばは社会情勢を映していると言えるだろう。ことばをきっかけに社会を考える。



第8章 権力とは何か―杉田 敦

◆政治思想論《ナショナルリズム》3700字

権力は、人間を縛るだけでなく、人々の生を支え保証する積極的な側面もある。その作用と効果の二面性について論じる。



第9章 ビッグデータ時代の「生」の技法―柴田邦臣

◆テクノロジー論《公共圏と親密圏》3500字

情報技術の進展は人間の「生」をどう変えるか。体験と知識が結びついた思考の展開をたどる。



第9章 「である」ことと「する」こと―丸山眞男

◆政治思想論《法と制度》6700字

現代日本においてなお、喫緊の課題であり続けている二つの論理・価値。戦後政治学の牽引車による定番評論。

《内はキーワード



第1章 ビジンという生き方 菅 啓次郎
◆文化論《クレオール》2800字
島という閉ざされた空間は多言語が出会う場でもある。筆者のハワイでの経験や言語に関する考えを綴った、詩的な表現が美しい評論。



第1章 「自然を守る」ということ 森岡正博
◆環境論《環境倫理学》2900字
「人間」と「自然」は対立項ではなく、実際には互いに深く結びついているのではないが、新たな気づきによって、従来の環境倫理学の枠を越えた提言を行う。自然環境論。二項対立と、その脱構築の仕方と学意でも意義ある文章。



第1章 虚ろなまなざし 岡 真理
◆ヒューマニズム《ヒューマニズム》3700字
声なき被害者の苦しみを、被害者になり代わって想像し、代弁しようとするとき、私たちが忘れてしまうものは何か。ヒューマニズムを謳う私たちの行動に隠された暴力性をあらわにし、無責任・無慮な義憤に駆られて行動することの危険性に気づかせてくれる文章。



第2章 物語と歴史のあいだ 野家啓一
◆歴史論《問主観性》2800字
ふつう「歴史」は社会や国家の共有物であり、個人の「記憶」「思い出」とは別個のものとして意識される。しかし、筆者はそれらを連続的なものと捉える。「歴史」に対するイメージを揺さぶる文章。



第2章 貨幣共同体 岩井克人
◆貨幣論《共同体》4100字
貨幣で商品を買うということは、実はとても不安定で不可思議な現象ではないか。貨幣で成り立つ社会の根源をあぶり出す。



第2章 ぼくらの民主主義なんて 高橋源一郎
◆政治思想論《公共圏》2000字
民主主義が民意によって何かを決定するシステムだとしても、そもそも民意とは何なのか、そしてそれはどのようにしてはかれるのか。具体的なエピソードを積み重ね、民主主義の本質についての問い直しを迫る評論。



第5章 思考の誕生 蓮實重彦
◆思想論《対話》2400字
当代きつての舌鋒の鋭さで知られる文芸・映画評論家による、アイロニーに満ちた思想論。自明視されることに揺さぶりをかける論理を味わいたい。



第5章 絵画の二十世紀 前田英樹
◆芸術論《リアリズム》4100字
十九世紀半ばに発明された写真技術。その圧倒的なリアリズムは絵画にも大きな影響を与えたが、それは同時に、絵画の本質を浮き彫りにするものでもあった。豊富な図版も交え、難解なテーマをわかりやすく解説する。



第5章 日本文化私観 坂口安吾
◆美学《美》3200字
文化とは、いま、人間が生き存在しているところにある。坂口安吾による痛快な日本文化論。



第6章 主義は広大なべきこと 福沢諭吉
◆啓蒙思想《近代》と漢文訓読体《2200字
分断・対立の無用を明晰な文章で説いた、明治を代表する啓蒙思想家の新聞論説文。漢文訓読体に慣れ、その明快さを味わいたい。



第6章 自由の説 中江兆民
◆自由論《自由民権運動と中江兆民》1600字
福沢諭吉と比較して読みたい、「東洋のルソー」による「自由」論。現代社会とも比べつつ、私たちの生きる社会の問題点を考えたい。



第6章 何のための「自由」か 仲正昌樹
◆自由論《アーキテクチャ》3000字
比較読みをさらに広げて、明治の自由論と現代の「自由」が持つ問題を読み比べたい。物事の本質へと、思考を深めていきたい。



第3章 つながりと秩序 北田暁大
◆現代社会論《メディア》3600字
携帯端末ははかばかに私たちのコミュニケーションを変容させたか。スマホ全盛の今、ひととき意義を増す現代社会論。自分のコミュニケーションのあり方を見つめ直すきっかけに。



第3章 真実の百面相 大森壮蔵
◆認識論《主観/客観》4300字
私たちは物事にはたった一つの「真実」があると考えがちだ。しかし本当にそうなのだろうか。私たちの認識を根幹から揺さぶる哲学者の重厚な評論。



第3章 死の恐怖について エリザベス・キューブラー・ロス
◆死生学《ケア》4400字
人間にとって決して避けえない「死」について、「死の受容のプロセス」を提唱したアメリカの精神科医による重要な問題提起。



第4章 ことばへの問い 熊野純彦
◆言語論《分節化》2500字
「ことばにならない思い」という概念さえも、「ことば」があつて初めて生まれる。「ことばこそ世界を創っている」という近代言語論の根幹を、静謐な筆致で再確認する一本。



第4章 物語としての自己 野口裕一
◆心理学《アイデンティティ》3800字
私たちの「自己」が形作られる仕組みを、「物語行為」という観点から解説した、新鮮なアイデンティティ論。「語る」ことと「生きる」ことの密接なつながりを認識させる。



第4章 ポピュリズムとは何か 森本あんり
◆政治思想論《分断》3200字
現代の民主主義において最も注目されている言葉の一つである「ポピュリズム」。その概念と特徴や構造を捉える。



第7章 ものとこと 木村 敏
◆認識論《対象》5500字
世界は「もの」として見るか、「こと」として見るか。認識論であり言語論であり、詩論でもある、極めて射程の広い評論。



第7章 「病氣」の向こう側 田中祐理子
◆医学《パラダイム・シフト》5800字
コロナ禍で幕を開けた二〇二〇年代。今まさに私たちの生命に関する認識が更新されているさなかで読み解きたい医学評論。



第7章 過剰性と過少性 佐伯啓思
◆贈与論《他者の欲望》4400字
資本主義はどのような原理で人に経済成長を強制するのか。貨幣と欲望の考察を通して思考力を鍛えたい。



第8章 記憶の満天 西谷 修
◆時間論・認識論《パースペクティブ》3600字
星空に映るのは《現在》ではなく《過去》であり、《空間》ではなく《時間》である。星空を見るとき、私たちはいったい何を《見て》いるのか、いま私たちは何が《見えて》いるのか。哲学的な思考へ誘う。



第8章 戦争と平和についての観察 中井久夫
◆戦争論《批判》4900字
人はいつ、どのように戦争に直面するのか。冷静な観察を通して「戦争」と「平和」について考察する。教科書末尾にふさわしい重要な問題提起。

●単元の目標

単元ごとに「単元の目標」を示しました。

単元の目標

この教科書は、それぞれの章に次のような学習目標があります。学習目標に注意して、見通しを持って学びましょう。

第1章

架橋することば



▼目標…人と世界を結ぶことばの働きを理解する

私たちはことばを用いて対象を認識し、互いの気持ちを伝え合い、未来への希望を語る。さまざまな形でことばは私たちを新たな世界に結びつけてくれる。ことばの働きを意識し、その限界を見極めるとともに、新しい可能性を見出だし、より良い世界を自分のことばで描き出そう。

第3章

〈私〉のいる場所



▼目標…偏見や先入観にとらわれない議論のあり方を考える

何らかの意見を述べるとき、そう主張する自分は社会においてどのような位置にあるのかを意識することなしに、説得力ある主張はできない。自身の認識のあり方や、他者のことばの受け止め方、また論拠に用いるデータの見方を検証し、偏見や先入観にとらわれない、説得力ある議論の組み立て方を考えてみよう。

第2章

日常の中の論点



▼目標…身近な物事を分析し、その仕組みを捉える

私たちの日常は、どのような根拠や前提の下に成り立っているのだろうか。具体的な事例を参考に、論証に必要な語彙や語句の量を増やすとともに、対比を用いた論の型を把握し、情報と情報との関係についての理解を深めよう。

第4章

変貌する時代、変貌する人間



▼目標…ことばと社会の関係を意識する

社会が抱えるさまざまな課題を人びとに訴え、解決への道すじを探ることも評論文の大切な役割である。それぞれの書き手が感じた現在の「問題」がどのようなことばで表現され、どのような処方箋が提示されているか。社会につながることばの働きを意識しよう。

単元の目標

各単元の「目標」を第一部・第二部の冒頭に提示しました。単元ごとの学びの見通しに役立ちます。

第5章

歴史に向き合う



▼目標…時代の隔たりから得られる知を学ぶ

過去の人々が残した思考の記録。それは時代を隔てたが故に現代人に新鮮なヒントをもたらす生きた「知」となり、また過去を振り返ることこそ、来るべき未来にとって現代がどのような時代であるべきかを批評できるのだ。「異時代」から届く豊かな声を聞き取る術を学ぼう。

第6章

世界を視る位置



▼目標…多面的な視点から文章を捉える

私たちはともすれば既知の見方にとらわれ、偏った判断を下しがちだ。自分を無意識に縛っている考え方から自由になるためには、さまざまな対象に対して新しい概念や切り口を持つ文章に接し、それらを読み解く中で新たな視点を生み出すことが大切である。多様な文章を通して、世界を多面的に捉える姿勢を身につけよう。

第7章

〈伝統〉を見つめ直す



▼目標…伝統を扱った文章を読み、書く力を鍛える

第9章

〈私〉をひらくために



▼目標…視野を広げ、自身の考えを見直す

考えを具体化するためには、独りよがりな主張にならないように、具体例をさまざまな視点から吟味する作業が必要になる。自分の経験を出発点に書かれた二つの評論文に触れることから、固定的な立場にとどまらない、広い視野を持つことの大切さを理解しよう。

第8章

現代という課題



▼目標…日常に潜む問題を見つけ出す

私たちの〈伝統〉はどのように根づいていくのか。対比を用いた論理的な文章から「記憶」を再構築した文章まで、〈伝統〉をめぐる多彩な表現を参考に、適切な資料を収集し、自分の主張を効果的に示す力を磨こう。

「資質・能力」アイコン

各単元で主に身につけたい「資質・能力」を示すアイコンを章ごとにつけてあります。

●おすすめの教材①

論理的思考を身につけるために必要な知識とともに、生徒の興味関心を引き出す魅力的なテーマや文章を採録しました。
〈第一部 第1章 架橋することば〉

100パーセントは正しくない科学

更科功

科学で重要なことは、推論を行うことだ。推論とは次の例のように、根拠と結論を含む主張がつながったものである（ちなみにイカの足は腕と呼ぶ方が生物学ではふつうだけれど、ここでは足と書くことにする）。

（根拠）イカは足が一〇本である。
（根拠）コウイカはイカである。
（結論）したがって、コウイカの足は一〇本である。

さて、このような推論には、演繹と推測の二種類がある。演繹では一〇〇パーセント正しい結論が得られるが、推測では一〇〇パーセント正しい結論は得られない。しかし、科学では推測が重要だ。重要だが、まずは演繹から見ていこう。

前の三つの主張から成る推論は、実は演繹と呼ばれるものである。そして、この演繹は一〇〇パーセント正しい。なぜなら二つの根拠が成り立っていれば、必ず結論が導かれるからだ。こういう演繹を行っていれば、科学でも一〇〇パーセント正しい結果が得られそうだ。でも、残念ながら、そうはいかない。

科学は、新しい情報を手に入れようとする行為だが、演繹では、新しい情報は手に入らないからだ。演繹をしても、情報は増えないのである。「根拠が成り立っていれば、必ず結論が導かれる。」ということは、「結論（の情報）は、根拠（の情報）の中に含まれている。」ということでもある。だから、いくら演繹を繰り返しても、知識は広がっていかないのだ。

科学の話に進む前に、「逆・裏・対偶」の説明も簡単しておこう。たとえば、先ほどの演繹の最初の主張は、「イカは足が一〇本である。」だった。

この主張の逆は「足が一〇本ならイカである。」だ。ちなみに、エビも足が一〇本なので、この主張は正しくない。

裏は「イカでないなら足が一〇本でない。」だ。ちなみに、この主張も、エビは足が一〇本



コウイカ

【視点】科学における推論とはどのようなもので、演繹と推測とは何が異なるのか。科学をめぐる論理の仕組みをしっかりと身につけよう。

1 コウイカ イカ類のうち、背面の外套膜（軟体動物に特徴的な、発達した表皮）の内部に石灰質の甲（貝殻）を持つものの総称。ハリイカ・マイカ・スミイカなどの別の名がある。甲烏賊。

【】「そうはいかない」とあるが、それはなぜか。

〔推論〕〔演繹〕〔推測〕〔対偶〕

視点

身につけたい資質・能力について、学びの見通しを立てやすくするため、すべての教材の冒頭に掲載しています。

脚注

文章を理解する上で必要な情報を掲載。

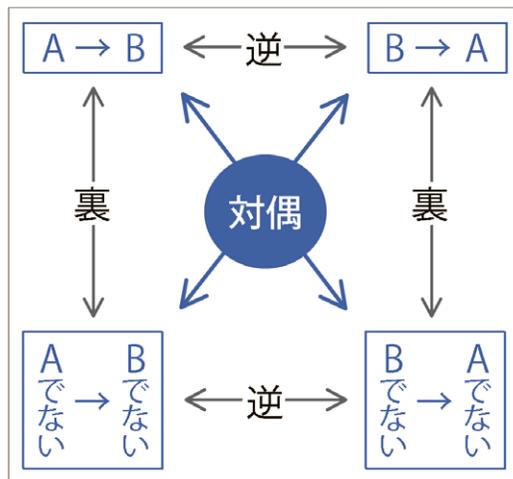
脚問

文脈を理解する上でポイントとなる部分は簡潔な脚問を通して確認。

写真

教材理解を深める図版や写真を適宜掲載。

適宜図版を挿入し、本文と照らし合わせながら、図版を読み取る力を養います。



なので正しくない。

対偶は「足が一〇本でないならイカでない。」となる。ちなみに、この主張は正しい。

この、逆・裏・対偶は、上の図のようにまとめられる。元の主張が正しくても、逆や裏が正しいとは限らないが、対偶は必ず正しい。

正しい演繹なら結論は一〇〇パーセント正しい。しかし、結論は根拠の中に含

10

まれているので、いくら演繹を繰り返しても知識は広がっていかない。

一方、推測の結論は一〇〇パーセント正しいとはいえない。しかし、結論は根拠の中に含まれていないので、推測を行えば知識は広がっていく。

たとえば（服は着ていたものとして）、「池に落ちた。」という根拠から「服が濡れている。」ことを結論するのは演繹だ。池に落ちれば、必ず服は濡れるからだ。つまり、「池に落ちた。」ことを知った時点で、「服が濡れている。」ことも同時に知ったことにな

15

るのだ。そのため、わざわざ演繹を行って「服が濡れている。」という結論を出したところで、周りの人からは「そんなこと知ってるよ。池に落ちたのなら、当たり前じゃないか。」といわれてしまう。演繹を行っても、知識は広がらないのだ。

一方、「服が濡れている。」という根拠から「池に落ちた。」ことを結論するのは推測だ。服が濡れているからといって、池に落ちたとは限らないからだ。雨に降られたのかもしれないし、ホースで水をかけられたのかもしれない。だから推測を行って、「池に落ちた。」という結論を出せば、周りの人からは「えっ、そうなの？ 全然知らなかった。」とかいわれる。推測を行えば、知識は広がるのだ。

5

科学では、必ず何らかの形で、この推測を使う。そして、よくあるケースでは、推測

によって仮説を立てる。それから、この仮説を、観察や実験によって検証するのである。

10

そして観察や実験の結果によって仮説が支持されれば、仮説はより良い仮説となる。だから、たくさん観察や実験の結果によって、何度も何度も支持されてきた仮説は、とても良い仮説である。そういう仮説は、「理論」とか「法則」と呼ばれるようになる。しかし、どんなに良い理論や法則も、一〇〇パーセント正しいわけではないのである。それはなぜだろうか。

15

科学の手順にはいろいろあるけれど、今まで述べてきたように、次の二つの段階を踏むものが多い。

〈仮説〉〈検証〉

本文フォント
読みやすさに配慮したユニバーサルデザインフォントを採用しています。

論理的な考え方を具体例を通して学べます。

- (一) 仮説の形成
- (二) 仮説の検証

それでは、まず(一)の仮説の形成を、コウイカというイカを例にして考えてみよう。コウイカというのは、カメの甲らに少し似ている殻を体内に持つイカで、脊椎動物を除けば、もともと知能が高い動物である可能性が高い。

さて、あなたは「イカは海にすんでいて足が一〇本である。」ことを(暗黙の前提として)知っているとする。そのうえで、あなたは「コウイカが海にすんでいる。」ことを観察した。

そこであなたは、「コウイカは海にすんでいる。」という証拠から、「コウイカはイカである。」という仮説を立てたとしよう。

証拠

(コウイカは海にすんでいる。)

仮説形成 ←

仮説

(コウイカはイカである。)

あなたは、この仮説をどうやって立てたのかというと、証拠をうまく説明できるような仮説を立てたのだ。「コウイカはイカである。」という仮説は(暗黙の前提としてイカは海にすんでいるので)「コウイカは海にすんでいる。」という証拠をうまく説明できるのである。

ここで説明という言葉を使ったが、「説明する」とはどのようなことだろうか。「コウイカはイカである。」という仮説が「コウイカは海にすんでいる。」という証拠を説明するというのは、「コウイカはイカである。」が正しければ、「コウイカは海にすんでいる。」も一〇〇パーセント正しいということだ。つまり、「説明する」というのは「演繹する」ということだ。

証拠

(コウイカは海にすんでいる。)

仮説形成 ← → 説明

(= 演繹)

仮説

(コウイカはイカである。)

これで(二)の「仮説の形成」の手順は終わりである。次は(二)の「仮説の検証」の手順だ。

仮説を検証するには、仮説から新しい事柄を予測しなければならない。証拠として使

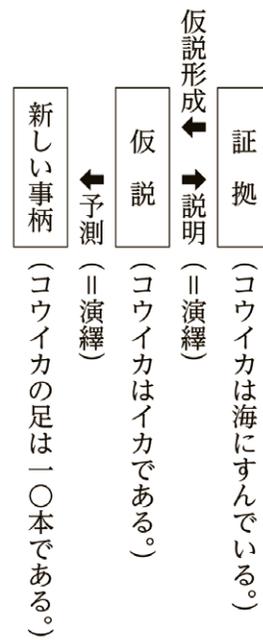
〈暗黙〉〈前提〉〈予測〉

重要語句

覚えておきたい熟語や成句・慣用句は見開きごとに整理。

図解と文章が一体化した教材を選びました。
論理の基礎が学べる冒頭にふさわしい教材です。

った事柄とは別の事柄を、仮説から予測して、それが事実かどうかを確かめるのだ。これが検証である。もちろん新しい事柄は、仮説によってうまく説明できるものでなければならぬ。つまり、新しい事柄は、仮説から演繹されるものでなければならぬ。
たとえば、(暗黙の前提として) イカの足は一〇本なので、「コウイカはイカである。」という仮説からは「コウイカの足は一〇本である。」という新しい事柄が予測できる。

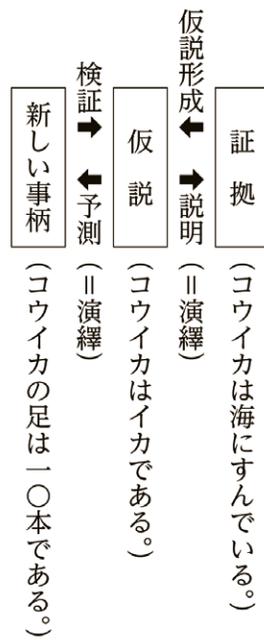


10

さて、新しい事柄を予測したら、次は、新しい事柄が事実かどうかを確かめなくてはならない。観察や実験によって、新しい事柄が事実かどうかを確認するのだ。
あなたは実際にコウイカを観察して、「コウイカの足は一〇本である。」ことが事実だと確認した。つまり、新しい事柄が事実であることを確認したので、仮説は実証された。

15

つまり、仮説はより良い仮説となった。



5

さて、科学の典型的な手順を説明してきたが、それは、科学がどうしても一〇〇パーセントの正しさに到達できない理由を説明するためだった。その理由を右の図を見ながら考えてみよう。

10

科学の正しさというのは、要するに仮説の正しさのことである。右の図を見ると、仮説に向かう矢印は、仮説形成と検証だ。仮説を支えているのは、つまり仮説の正しさを保証するのは、仮説形成と検証なのだ。
ところが、仮説形成も検証も、論理の向きが演繹とは反対になっている。つまり、演繹の「逆」になっている。そして、さきほど述べたように、ある主張が正しくても、その逆は必ずしも正しくない。

15

〈典型的〉〈到達〉
〈保証〉

キーワード

教材に即した「キーワード」を示しました。

構成

評論の構成を分かりやすく、問いの形で示しました。

課題

教材冒頭の「視点」に対応して、各教材を通じて身につけたい課題を示しました。

主な著書

著者紹介の末尾には、より深く学びたい生徒のために、著者の代表的著作を紹介して、読書活動に配慮しました。

重要漢字……

- 20腕 (手腕) 21線 (線戸) 23踏 (手段) 23踏 (踏襲) 24黙 (黙示) 25柄 (横柄) 26認 (認知) 27到 (到来)

重要漢字

本文中の常用漢字から、学ぶべき漢字を選び、本文中の使われ方以外の熟語を示しました。

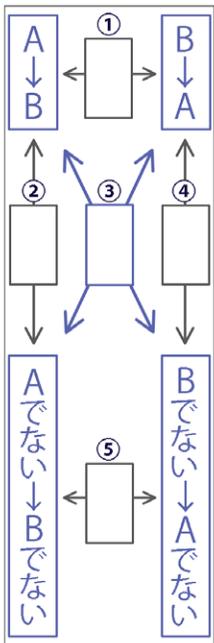
📌 仮説と検証……自然科学の確からしさを保証するのは観察や実験による検証である。未知の情報を含む仮説はさまざまな角度からの検証に耐えることによって、より良い仮説への道を歩む。その際注意すべき点の一つに「反証可能性」(誤りを確認できること)がある。仮説の真偽が明確にならなければ検証は成り立たない。別の観点で見れば、偽とはっきり分かる仮説も科学研究においては立派に意味があるのだ。

📌 科学的推論の持つ性質や論理のあり方を理解しよう
 科学を理解するためには、論理的な思考方法をきちんと身につけることが大切になる。物事を筋道立てて考えるために役に立つ論理学の用語や、科学における仮説の意味などを学びながら、科学が「100パーセントは正しくない」とはどのようなことなのか、しっかり考えていこう。

読解学習

「課題」を元に、取り組みやすい「構成」「読解」「言語活動」を示しています。

学習の手引き



- 読解
 1. 「演繹」(二〇・二)と「推測」(同)の違いを説明しなさい。
 2. 「証拠をうまく説明できるように仮説を立てた」(二五・一)とあるが、どのようにすれば「うまく説明できる」のか、説明しなさい。
 3. 「仮説に対して100パーセントの正しさを保証できない」(二八・三)のはなぜか、筆者の議論を整理して説明しなさい。
- 言語活動
 1. 身近な出来事から推論の例を考え、本文にならってその推論を図に書いて説明してみよう。

言語活動

教材を手掛かりにして、教室で実践できる「言語活動」を掲示しました。

読解

教材の理解に役立つポイントを、問いの形式で示しました。



更科 功 一九六一(昭和三六)年。生物学者。東京都に生まれた。古代生物の遺伝子などを研究する分子古生物学を専門とし、生命進化の奥深さを解説する活動でも知られる。この文章は二〇一九年刊行の『若い読者に贈る美しい生物学講義』に収められており、本文は同書によった。

❖ 主な著書 『化石の分子生物学』『絶滅の人類史』『宇宙からいかにヒトは生まれたか』など。

科学では、仮説による説明や予測を演繹にしなければならないので、仮説の正しさを保証する仮説形成や検証が、どうしても演繹の逆になってしまう。だからどうしても、仮説に対して100パーセントの正しさを保証できないのである。

新しい事柄を知るためには、100パーセントの正しさは諦めなくてはならない。これは仕方のないことなのだ。それでも、私たちは知識を広げてきた。真理には到達できなくても、少しでも、そこに迫ろうとして。生物学も、そんな科学の一部であることを、いつも頭の片すみに置いておくことにしよう。

〔真理〕

●おすすめの教材②

今注目の著者による、最新の評論テーマもしっかりフォロー。
〈第一部 第4章 変貌する時代、変貌する人間〉

書 第4章 変貌する時代、変貌する人間

人新世における人間

いまから四六億年前、太陽から三番目の位置に岩石質の惑星が誕生した。後に地球と名づけられるこの惑星は、月の形成や地軸の傾き、生命の誕生と多様化など、さまざまな紆余曲折を経て現在にいたる。紆余曲折の一端は、地球に堆積した地層のなかに痕跡として残されている。

地層のできた順序を研究する学問は層序学と呼ばれる。地質学の一部門である。その層序学によると、もっとも大きな地質年代区分は「代」（古生代、中生代、新生代など）で、それが「紀」（白亜紀、第四紀など）に分かれ、さらに「世」（更新世、完新世など）に分かれる。現在は一一七〇〇年前に始まった新生代第四紀完新世の時代である、というのがこれまでの定説だった。

それが現在、すでに完新世は終わっており、新たな地質年代に突入しているとする学説が真剣に検討されている。新たな地質年代の名は「Anthropocene」（アントロポセン）、人類の時代という意味だ。日本語では「人新世」と書き、「じんしんせい」または

吉川浩満

〈視点〉新しいことばの発明によって、世界の見え方が変わることがある。「人新世」という語が提示する視点について、筆者の主張を読み取ろう。

「紆余曲折」とは、ここではどのような意味か。

linkマーク

『論理国語』でもlinkマークのある教材は、インターネット上に参考資料があります。教科書「凡例」ページのQRコードもしくはURLを開くと、小社ホームページの「参考資料一覧」に遷移し、各種参考資料へのリンクが掲載されています。



論理国語

●おすすめの教材③

歴史の新しい知見を発見する喜びと、新しさを理解してもらおうことの難しさ。「論理」を受け取る側の姿勢を鋭く突いて、「論理国語」の授業に深みを与えます。
〈第一部 第5章 歴史に向き合う〉

日本の社会は農業社会か

網野善彦

江戸初期、時国家と姻戚の関係にあり、深い因縁をもっている柴草屋という廻船商人が、町野川の河口の港で活動しています。戦国末期のころ、内浦の庵にも柴草屋がいたことがわかっていますので、おそらくその名跡を継いだ廻船商人で、大船を二、三艘持ち、日本海の廻船交易にたずさわっていたのだと思われます。この家から時国家が、江戸初期に百両の金を借用していますから、柴草屋はそれだけの金を融通できる財力を持つ、富裕な廻船商人であったことは間違いない。宮本常一さんもこの家に注目しています。

ところが、文書を江戸時代前期まで読み進めていったところ、われわれは、この柴草屋が頭振に位置づけられていることに気



〈視点〉新たな資料との出会いによって、積年の思い込みの呪縛が解かれることもある。歴史を見直す面白さがそこにある。

- 1 時国家 石川県輪島市町野町に現存する旧家で、平氏の子孫とされる。
- 2 廻船商人 船を用いて港から港へ物資を輸送することを生業とした商人。
- 3 町野川 石川県の輪島市を通って日本海に注ぐ川。
- 4 内浦 石川県鳳珠郡穴水町にある港。
- 5 名跡 家々で代々継承される家名・称号。
- 6 両 江戸時代の貨幣単位。
- 7 宮本常一 一九〇七―八一年。民俗学者。
- 8 われわれ 筆者と神奈川大学日本常民文化研究所両者は一九八〇年頃から時国家所蔵資料の整理・調査を行っていた。

図版

教材理解を助ける地図などの図版を適宜掲載しました。

●おすすすめの教材④

生徒たちが生き抜いていかなばならない社会の本質を、最新の評論とともに学びます。
〈第一部 第4章 語りと世界〉

ポピュリズムとは何か

もりもと
森本あんり

〈視点〉現代の民主主義において、ポピュリズムにはどのような特徴や危険性があるのだろうか。その構造を捉えよう。

「ポピュリズム」を定義するのは難しい。ポピュリストには右も左もあり、保守派も進歩派もあり、国粹主義者もいれば社会主義者もいて、どのような定義をするにしても、それらすべてを一つの定義のもとに包摂することはできないからである。そして、まさにこの点にポピュリズムの固有な特徴がある。ジョージア大学²の政治学者カス・ミュデによると、ポピュリズムにはそもそもイデオロギー的な理念の厚みが存在しない。従来⁵のイデオロギーは、全体主義にせよ共産主義にせよ、政治や経済から文化や芸術まで、社会全体のあるべき姿を描き出そうとしたものである。

だが、ポピュリズムはそのような全体的な将来構想をもたない。あるのはただ、「雇用」「移民」「テロ」⁵など、その時点でその社会がもつ特定の政治的アジェンダに限定した語りかけの言説である。だからポピュリストは、あれこれの不特定イデオロギーに仮託して世界観的な厚みの欠如を繕おうとするのである。当然ながら、その結びつきに方向性や一貫性があるわけではないので、借用物は時と場合に応じて自由に変幻することになる。ポピュリズムを理解することが難しいのは、この融通無碍^{ゆうつうむじ}な性格のゆえである。

1ポピュリズム 大衆迎合主義【英語】populism
2「この点」とは何をさすか。

2ジョージア大学 アメリカ合衆国ジョージア州に本部を置く州立大学。
3カス・ミュデ Cas Munde 一九六七年。オランダの政治学者。

4イデオロギー 人間の思想・行動・生活の仕方などを制約している根本的なものの考え。「ドイツ語 Ideologie

5テロ テロル(ドイツ語 Terror)の略。暴力

●おすすすめの教材⑤

「論理的な思考を身につける」とは、たんなるテクニックを得ることではなく、一見論理的に思える議論の土台を疑う意識を養うこと。議論の背景に危うい「前提」が隠されていないかどうかを吟味する、論理的思考の根幹を育てます。〈第一部 第2章 日常の中の論点〉

本当は怖い「前提」の話

かわぞえ
川添 愛

〈視点〉「前提」の「怖さ」とは一体何か。言語学の知見を通じて、何気なく使われる「前提」という概念を捉え直してみよう。

知識や技術の中には、世の中に広めていいか悩ましいものがある。自然科学の中にも、役に立つ反面、人を傷つける凶器や兵器を作るのに使われたりする知識がある。なかなか難しいものだ。

言語学は、そういった物騒さとはあまり縁がないように見える。もちろん言葉そのものは危険物であり、人間が引き起こす悪いことの多くは言葉を介して起こっているが、言語学の知識の大部分は人畜無害だし、健康とか環境問題についての知識と同様に、大勢の人に知られた方が多いものが多いと思う。ただ、昔から個人的に「これは危ないかも。」¹と思っているものが一つある。

あるドラマの中で、警察学校の生徒たちが事情聴取の練習をする場面がある。生徒が警察官と容疑者の役になってロールプレイをし、次のようなやりとりをする。

警官役の生徒「〇月×日、あなたは現場近くを車で通りかかりましたね?」
容疑者役の生徒「いいえ。通りかかってないですよ。」

10

1「危ない」とはどのような意味か。

1ロールプレイ 特定の場面を想定して複数人がそれぞれ関係する役を演じることで、想定された場面が実際に起こったとき

● 評論入門

「第1章・第2章」の末尾では、評論読解のポイントを詳しく説明しました。

評論入門 一

論理的に文章を読み解くために

今までの学習で私たちはさまざまなタイプの文章に接し、その読み方を学んできた。その上で、「論理国語」では実社会で必要とされる論理的・批判的な思考を身につけるために、実用的な文章や、筆者が自身の考えを論理的に述べた評論文の読解を行っていくことになる。

ここでは、そうした論理的な文章の読解に必要なポイントを簡潔にまとめておくので、参考にしてほしい。その際大切なのは、①文章に込められた筆者の考えや主張が、②どのような筋道で述べられているか、その構造を捉えることだ。

1 筆者の主張を捉えよう

長く複雑に見える文章でも、中心となる主張は多くの場合シンプルに押さえることができる。次の点に注意して、まずは大づかみに文章を読解してみよう。

- ・どんな問題について書かれた文章か。(主題をつかむ)
- ・それに対する筆者の考えはどのようなものか。(問題提起を読み取る)
- ・筆者の出した解答はどのようなものか。(結論を理解する)

2 議論の構造を捉えよう

主張を成り立たせる議論の展開の仕方を把握することが、評論文の読解にとっては最も重要になる。①で読み取った筆者の主張が説得力を持つかどうかは、その議論がどのように展開されるかにかかっている。

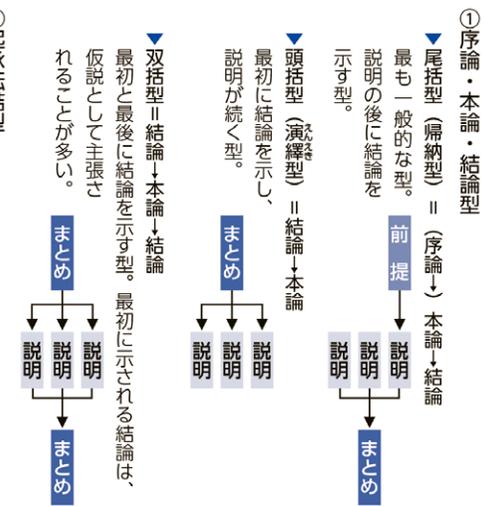
- ・前提となる考え方や収集されたデータや情報はどのようなもので、それらはどう扱われているか。(議論の出发点や主張の根拠を押さえる)
- ・議論の材料となる根拠や情報、多様な観点からの意見がどのように組み立てられ、最終的に論理的な展開を読み取り、

議論の構造を捉えるための視の四点に注目してみよう。

- ◆ 主な文章構成の型を意識する
- ◆ 対比に注目して論点を整理する
- ◆ 具体化と抽象化(一般化)を押さえる
- ◆ レトリック(比喩)の働きを捉える

議論の構造を捉える四つの視点

◆ 主な文章構成の型を意識する



② 起承転結型

- ▼ 起 話題を起す……問題提起・導入。
- ▼ 承 話題の展開……問題提起・導入を受けて、具体的に議論を深める。
- ▼ 転 話題の転換……異なる立場からの意見を提示したり、これまでの議論を踏まえて、より重要な論点を示したりする。
- ▼ 結 話題の結び……議論のまとめ・結論。

◆ 対比に注目して論点を整理する

- ・二つの事柄の共通点と相違点を明らかにする
- **ポイント** 文章内の要素や立場などの対比関係に注目することで、議論全体を論理的に整理し筆者の主張を明確にすることができる。

◆ 具体化と抽象化(一般化)を押さえる



○ ポイント 個々の事物は独自の特徴を持つ一方、多

評論入門 二

「テーマとキーワード」は、「論理国語」では、さまざまな分野の評論を学習する。一見多岐にわたる評論の数々だが、それらは多くの場合「言語」「近代」「科学」など、いくつかの主要なテーマで捉えることができる。また、一つの評論の中で、複数のテーマが横断的に扱われていることもある。現代とは、無数の要因が複雑に絡み合った問題を抱えた時代だからだ。評論を読む時には、扱われているテーマにとって重要な知見や人物を知っておくこと、そしてそのテーマにおいて用いられることの多い「キーワード」をしっかり理解しておくことが大切だ。まずは使われている「キーワード」の本来の意味を正確に理解しよう。さらに、文章の筆者がその「キーワード」にどのような意味を込めているのかを、文脈から丁寧に読み取る。評論では、「キーワード」が本来の意味から離れて、発展的に用いられていることもある。基本的な意味をきちんと把握しておくことで、内容理解の深さが格段に違ってくるだろう。評論読解に重要なテーマとキーワードを左に掲げた。参考にして、私たちが生きる「現代」の問題に向き合っていきたい。

◆ 記号・文化 —— 言語の分節化

物事を区別するとき、私たちは言語を用いる。しかし、日本語の「米」を英語では「rice」と呼ぶように、言語によってモノを表すことは異なる。また英語では「米」「稲」「ご飯」も、すべて「rice」で表すように、言語によって何が表す範囲も異なる。「何をどう呼ぶか」という、ことばによる対象の切り分けを分節化

◆ 自己・社会 —— アイデンティティと「他者」

「アイデンティティ」とは「自分が、他の誰とも異なる自分である」という感覚のことをさすが、誰も、自分ただ一人だけの世界で「自分らしさ」などというものを見つけることはできない。「自己」とは、常に「他者」に社会における他の人々とのかわりや眼差しの中で確定されていく。だからこそ、自分の社会的な位置や社会と



実践③：資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう

現代社会には情報があふれているが、中には信頼度の低いものも含まれている。また、データを集める側が無意識に特定の情報にフィルターをかけてしまうこともある。主張を組み立てる際には、根拠となる情報の「質」を吟味することが重要だ。

レッスン

データの根拠を確かめよう

データなどの情報を読み解く練習をしてみよう。その際には次のような点に注意してデータの根拠を確認しよう。

- 1 世論調査のようなアンケートでは、調査対象や質問の仕方によって結果が左右される場合がある。いつ、誰が、どこで、どのように集めたデータなのか、調査の対象となった集団（母集団）にはどのような特性があるかを確かめよう。
- 2 インタビューでは、質問者（インタビュアー）の質問意識が答えを誘導してしまう場合がある。質問者

がどのような問いかけをしているかに注意しよう。情報やデータの根拠が自分だけでは確かめられないこともある。その場合は、同じテーマを扱っている別の著者や論者の意見を確かめよう。複数の主張を比較することで、特定の立場に偏らない情報を集約することができる。

アドバイス

・社会の中で意見が対立する問題を取り扱う際、データはしばしば論者の立場から解釈される。自分にとって都合のよくないデータから目を背けることなく、より公平な立場から、データの傾向を説明することが求められる。

活動例
具体的なアクティブラーニングの例を示しました。

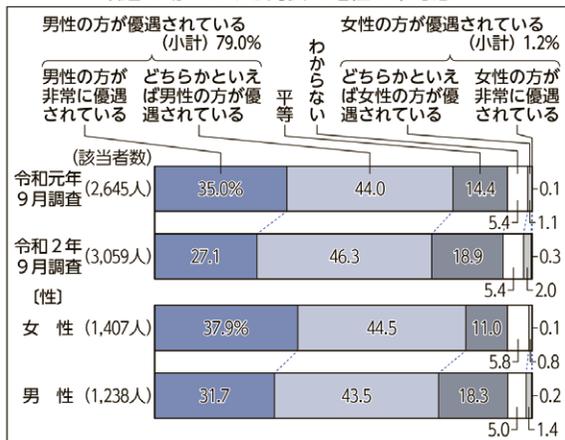
活動例

「ジェンダーギャップ」について考えよう

世界経済フォーラムは、毎年、社会の中の男女格差の度合いを示す「ジェンダーギャップ指数」を公表している。一方、内閣府では毎年「男女共同参画社会に関する世論調査」を実施、その結果をホームページで公表している。この二つのデータを踏まえて、今後求められる取り組みについて考えよう。

- 1 世界経済フォーラムの調査では、どのような基準で各国の比較がなされているか、確かめよう。
- 2 内閣府の調査では、どのような調査がなされているか確認しよう。また、調査項目を一つ選び、回答の移り変わりを調べてみよう。
- 3 二つの調査結果を比較することから、現在の日本ではどのような取り組みが求められているか、自分なりに考えてみよう。この問題を取り上げた文献を読んで、参考にするとよいだろう。

政治の場における男女の地位の平等感



▲内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(2019年9月調査)より「あなたは、今からあげよう分野で男女の地位は平等になっていると思いますか。：政治の場」に対する回答。

●世界経済フォーラムによる「ジェンダーギャップ指数」(2019年発表。0が完全不平等、1が完全平等。)

上位国及び主な国のジェンダーギャップ指数

1	アイスランド	0.877
2	ノルウェー	0.842
3	フィンランド	0.832
4	スウェーデン	0.82
5	ニカラグア	0.799
10	ドイツ	0.787
15	フランス	0.781
21	イギリス	0.767
53	アメリカ	0.724
106	中国	0.676
108	韓国	0.672
121	日本	0.652

文学国語

良質な小説・詩歌から、文学を深く掘り下げる評論・随想まで、ことばの本質を問い、人文知の扉を開く、筑摩書房全力投球の国語教科書。



東京大学 安藤 宏

編集委員のことば

「文学」を国語教育の中でどのように位置づけるべきか、従来もさまざまな議論が積み重ねられてきました。これを情操教育の一環として、言語運用能力の育成と区別する立場もありますが、筑摩書房の教科書は一貫してその逆、つまりコミュニケーション能力の育成と文学教育とを不可分のものと考え、立場を取っています。

もともと「文学」ということは、歴史的には文字で書かれた学問の全てを指す総称であり、この語が狭い意味での言語芸術の名称として用いられるようになったのは明治も後半になってからのことでした。近年、人文科学の世界ではこうした反省からあらためてこれを広く文化全体の中で捉え直そうとする動きが一般化しており、こうした流れを踏まえた上で、本教科書もまた、旧来の狭い「文学」概念からの脱却を目指しています。

ことばは、人間の想像力が発動するすべての出発点です。宗教、イデオロギー、貧富の差などによって世界の分断が進む中で、さらにはネット社会固有の孤独な状況がすすむ中で、異質な他者や世界の成り立ちについて考えていく「人文知」は今日ますますその重要性を増しており、「文学」はまさにその中核をなすものです。文学教材は決して「博物館の陳列ケース」の中の過去の文化財としてあるわけではありません。これからの現代社会を生き抜いていく上で、なくてはならぬ知恵の泉なのです。

今回のわれわれの提案を、あるべきあらたな「国語」の姿として、積極的なご支持を頂ければこれに過ぎる幸いはありません。

文学国語（文国708） 編集のポイント

●多様なレトリックと豊かな想像力、人間とことばの本質を掘り下げる「文学的な文章」を、文芸作品に限定せずバラエティ豊かに採録しました。

●大学入試はもちろん、未来を切り開く、多様なものの見方・考え方を示す文章を意識的に選択しました。

《教材の特徴》

- ①第一部10単元27教材（うち韻文5本）、第二部8単元21教材（うち韻文4本）と充実のラインナップ。
- ②原則として各単元内の教材配列は易→難へ。
- ③定番の小説・詩歌教材はもちろん、「文学とは何か」について深く思考を巡らせ、議論を深めることのできる随想・評論教材まで幅広くセレクト。
- ④生徒によってさまざまな資質・能力を引き出せる奥の深い教材を厳選。

《授業を支える工夫》

- ①「第一部」「第二部」の冒頭に学びの見通しを立てるために役立つ「単元の目標」と教材ごとの「視点」を提示。
- ②教材ごとに学びを深める「理解」と「表現」を提示。
- ③教材ごとに理解の幅を広げる知識やヒントをコンパクトにまとめたコラム「読解の窓」を掲載。
- ④比べ読みの練習に、「参考」の文章を適宜掲載。
- ⑤主体的な学びを支える「実践」を適宜掲載。

文学国語 編集委員

- 安藤 宏 東京大学
- 門屋 敦 東大寺学園中・高等学校
- 紅野謙介 日本大学
- 河野龍也 東京大学
- 五味洵典嗣 早稲田大学
- 清水良典 愛知淑徳大学
- 関口隆一 筑波大学附属駒場中・高等学校
- 橘 直弥 灘中学校・高等学校
- 仲島ひとみ 国際基督教大学高等学校
- 服部徹也 東洋大学
- 松田顕子 立教新座中学校・高等学校
- 吉田 光 東京都立竹早高等学校

文学国語

目次

●教材数は、第一部10単元27本(うち韻文5本)。
●バラエティ豊かなジャンルから構成。

単元の目標……………10

第一部

目次

第1章…読む ことばから広がる世界 **新** プラスチック膜を破って 梨木香歩……………12
随想・評論(一)

読解の窓
自分の殻・他者の壁……………20
メディアと身体……………26

第2章…書く 物語との出会い **新** バイリンガリズムの政治学 今福龍太……………27

ポストコロニアリズム・越境……………33

山月記 中島 敦……………34

小説の中の会話……………46
書き換えられたデビュー作……………55

神様 川上弘美……………47

小説の中の会話……………46
書き換えられたデビュー作……………55

実践0 構成と展開を工夫して、変身物語を書こう……………59
◇小説のポイント……………60
新 (参考)「私は」——書き出しの二行 角田光代……………63

発見された「日本の美」……………72
映像メディアと編集……………78
リテラシーとレトリック……………87

第3章…読む 背後にあるメッセージ **新** 実体の美と状況の美 高階秀爾……………66
随想・評論(二)

メディアと倫理 和田伸一郎……………73
ラムネ氏のこと 坂口安吾……………79

第4章…読む 現実を揺さぶる想像 **新** 異なり記念日 齋藤陽道……………88
随想・評論(三)

コミュニケーション・モード……………95
認識・言語・分節化……………102

第5章…読む 自己と向き合う **新** 記号論と生のリアリティ 立川健二……………96
随想・評論(四)

破壊と再生……………113

第6章…読む 過去との対話 **新** 金縷いの景色 藤原辰史……………103
随想・評論(五)

テクストの細部……………140

第7章…読む 世界観を築く **新** 空と風と星と詩 茨木のり子……………159
随想・評論(六)

亡くなった人たちの声に耳を傾ける……………158
『論語』の魅力・古典の味わい……………168

第8章…書く 調べとリズム **新** 未来をつくる言葉 ドミニク・チェン……………182
随想・評論(七)

韓国文化・文学……………181

第9章…読む 思考の道筋をたどる **新** 建築論ノート 松山 巖……………188
随想・評論(八)

身体と他者……………187

第10章…読む 日常の裂け目 **新** 小景異情 室生犀星……………204
随想・評論(九)

引用……………195

第11章…書く 調べとリズム **新** 文学の仕事 加藤周一……………220
随想・評論(十)

共感と鎮魂……………203

第12章…読む 日常の裂け目 **新** 捨てない女 多和田葉子……………238
随想・評論(十一)

パラダイム・シフト……………229
アイデンティティの二側面……………237

第13章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十二)

小説の創造力……………244

第14章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十三)

沖縄文学……………267

第15章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十四)

沖縄文学……………267

第16章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十五)

沖縄文学……………267

第17章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十六)

沖縄文学……………267

第18章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十七)

沖縄文学……………267

第19章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十八)

沖縄文学……………267

第20章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(十九)

沖縄文学……………267

第21章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十)

沖縄文学……………267

第22章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十一)

沖縄文学……………267

第23章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十二)

沖縄文学……………267

第24章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十三)

沖縄文学……………267

第25章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十四)

沖縄文学……………267

第26章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十五)

沖縄文学……………267

第27章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十六)

沖縄文学……………267

第28章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十七)

沖縄文学……………267

第29章…読む 日常の裂け目 **新** 魂込め 目取真俊……………245
随想・評論(二十八)

沖縄文学……………267

すべての教材に生徒の興味関心の幅を広げ、
理解を深めるコラム「読解の窓」。

新しい小説や、長めの小説も取り上げました。

比べ読みに最適な「参考」教材。



文学国語

目次

●第二部の教材は8単元21本(うち韻文4本)。



第一部

目次

単元の目標……………	270		
第1章…読む	物語が生まれる場所 随想・評論(一)	270	
小説とは何か	三島由紀夫……………	272	
〔参考〕遠野物語	柳田國男……………	278	
陰翳礼讃	谷崎潤一郎……………	280	
新	みづの上日記	樋口一葉……………	288
舞姫	森 鷗外……………	292	
フォーカス②	近代小説の誕生……………	321	
靴	安部公房……………	322	
小説と現実……………		328	
読解の窓	柳田國男と民俗学……………	277	
	日本文化論……………	287	
	女性職業作家の先駆け……………	291	
	「舞姫」と日本の近代……………	320	
実践③	「編集」という表現方法を楽しもう……………	329	
第2章…読む	交差するドラマ 小説(一)	329	
第3章…読む	新たな視座を得る 随想・評論(二)	330	
新	へうだてき場所の言葉	吉田文憲……………	330
絵画は紙幣に憧れる	榎木野衣……………	340	
隠れん坊の精神史	藤田省三……………	347	
水仙	太宰 治……………	354	
新	王国	津村記久子……………	370
無常ということ	小林秀雄……………	384	
骨とまぼろし	真木悠介……………	390	
ある〈共生〉の経験から	石原吉郎……………	397	
無題	吉原幸子……………	408	
旅情	石垣りん……………	410	
新	N森林公園の冬	北村太郎……………	412
俳句	……………	416	
藤野先生	魯迅……………	420	
沈黙	村上春樹……………	429	
寛容は自らを守るために不寛容に対して 不寛容になるべきか	渡辺一夫……………	452	
チャンピオンの定義	大江健三郎……………	459	
二者択一の罫……………		458	
ことばと文学……………		470	

主体的な学びを助けるアクティブ・ラーニング例としての「実践」。

第6章…読む	詩歌という隣人 詩歌	408
第7章…読む	小説の可能性 小説(三)	416
第8章…読む	未来を問う 随想・評論(四)	420

実践④

創作の背景について調べよう…………… 471

読書案内……………	472
〔付録〕近現代文学史……………	474

文学の可能性やその豊かさを示す文章も多数掲載しました。

教材のポイント

第1章 プラスチック膜を破つて―梨木香歩 3100字

周りの情報を遮断して個々人の世界に閉じこもる様子を「プラスチック膜」という比喩で表現し、それが破れて感情が伝わり合う喜びを児童文学者らしい軽妙な語り口で綴る。新学年の生徒の緊張を解きほぐす、『文学国語』の冒頭にふさわしい教材。

第1章 情報の彫刻―原 研哉 2400字

電子書籍や電子教科書など、メディアの非物質化が進む現代だからこそ、「紙」の書籍の魅力が一層生きてくることを簡潔明快に語る。「電子メディア／紙というメディア」という対比的な考え方にも触れられる。

第1章 バイリンガリズムの政治学―今福龍太 2800字

一つの道路標識の背後に潜む複数の境界線のレトリックについて、筆者独自の着眼点から想像力を駆使する。生徒の視野を広げる絶好の教材。

第2章 山月記 中島 敦 6000字

虎に変身する、というフィクションを通して、人間の自我をめぐる葛藤が描かれる。会話文や心理描写など多様な着眼点から、小説を読み解く楽しさを幾重にも知ることができる。定番かつ新たな発見も得られる小説教材。

第2章 神様―川上弘美 3500字

近所に「くま」が引越してきたという寓話的な題材を通して、異質な他者とのあり方を考えさせられる短編小説。著者は二〇一一年の東日本大震災を受け、細部を緻密に書き換えた「神様2011」も発表した。本教科書にはこちら一部抜粋して掲載しており、比べ読みができる。

第3章 実体の美と状況の美―高階秀爾 3200字

西洋と東洋の美意識の違い、美意識の中に潜む文化的な基準を、歴史上のさまざまな具体例からあぶり出す。文学や美術など豊富な痕跡をたどり、比較文化論の入り口としても親しめる教材。

第6章 死者の声を運ぶ小舟―小川洋子 3900字

人々が打ちのめされ、破壊される悲劇の前に、「文学」はどのような力を持ち得るのか。自身も小説家である筆者は、死者の声、声にならない声を伝え続ける文学作品の事例を紹介し、そこに可能性を見いだす。文学作品を読み進める上で、羅針盤となる教材。

第6章 論語―私の古典―高橋和巳 4600字

『論語』はいかにして筆者に「私の古典」と言わしめるものとなったのか。文学作品との出会いを体験記のように綴る筆者の語り口には、読み手に『論語』を読みたいと思わせる力が宿る。漢文との横断的な学習も可能な教材。

第6章 空と風と星と詩―茨木のり子 4300字

筑摩書房独自の定番教材。第二次世界大戦中の日本で、特別高等警察に反乱分子の嫌疑をかけられ獄死した韓国の青年詩人「尹東柱」の詩を、同じく詩人の茨木のり子が哀悼をこめて振り返る。

第7章 未来をつくる言葉―ドミニク・チェン 2600字

「わかりあえなさ」をつなぐという、言葉との新たな向きあい方について、筆者の主張を基に思考を深められる教材。SNSなどのインターネットツールが進化し、表現とコミュニケーションとの関係が複雑化する現代においてこそ、ことばのもつ「架橋」の力を実感し、文学を読む意義を理解したい。

第7章 建築論ノート―松山 巖 3200字

生活を営んできた建物を容易に壊しては作り直す、という姿勢は、私たち人間に何をもちたらずのか。トマス・ハーディの詩の引用、そして比喩とレトリックを駆使して、その破壊性を読み手に訴える、文学的な評論教材。

第7章 「能」時間の様式―杉本博司 3500字

写真家である筆者が、「記憶」と「時間」をテーマに、墓石の写真、ミイラ、そして能へと論旨を展開させていく。いく種類もの時間が同時並行に流れる能の奥深さを、まさに読み味を与える教材。

第3章 メディアと倫理―和田伸一郎 2700字

ベトナム戦争を題材に、報道写真と、同じ出来事がライブ中継された場合との差異の中から、テレビ視聴者に固有の倫理的なジレンマを導き出す。多様なメディアから情報を受け取る今、本教材が、メディアへの批評的な想像力と文学的表現力を獲得する契機となるだろう。

第3章 ラムネ氏のこと―坂口安吾 3200字

当然のように存在する事象の背後には、何かに徹することに生涯を捧げた名も知れぬ先人がいるはずだという事実を指摘し、人が生きることの意味を読者に淡々と問いかける。今このように世界があることと人が生きることとの関係について、文学者の眼差しを通して深く考えさせられる名教材。

第4章 異なり記念日―斎藤陽道 3500字

多様な背景を持つ他者とのように出会い、触れ合うか。先天性の感音性難聴を持つ筆者の経験を、親しみやすい文体で追体験しながら、根の深い社会問題へと考えが深まる教材。

第4章 記号論と生のリアリティ―立川健一 2800字

事物の自明性を疑い、世界が記号のシステムによって秩序づけられていることを、筆者は具体例を用いて明瞭に指摘する。文学の理解に不可欠な記号学の知見を踏まえた表現手法を学ぶことができる教材。

第4章 金繕いの景色―藤原辰史 6600字

器を長く愛用するため欠けやひびを少しずつ修繕し、ときに修繕痕も慈しみの対象とする金繕いの手法は、新品に覆われた現代社会を省みる糸口になる。日本の伝統に秘められた豊かさに、目が開かれる教材。

第5章 こころ―夏目漱石 20300字

言わずと知れた定番の小説教材。自己に徹底的にこだわり、苦闘してきた近代という時代を色濃く映し出したこの小説は、しかし現代にも通じる普遍的な魅力を放つて読み手の胸に迫ってくる。直後に掲載した「私の個人主義」と併せて読み解きたい。

第8章 詩歌

必ず知っておきたい名詩歌選。「小景異情」(室生犀星)「サーカス」(中原中也)「永訣の朝」(宮澤賢治)と、近現代短歌、「死にたまふ母」(斎藤茂吉)

第9章 化物の進化―寺田寅彦 4900字

「化物がないと思うのはかえって本当の迷信である」とする、一見すると意味の通らない主張を、筆者は科学的な知識と経験に基づいて鮮やかな逆説へと仕上げていく。物理学者として有名な一方、数多くの随筆も残してきた筆者の特異な痕跡が垣間見える教材。

第9章 文学の仕事―加藤周一 3500字

社会にあつて、「文学」が果たすべき役割とは何か。筆者が繰り出す具体例はそれだけでも面白いが、その中から見えてくる文学の意義についての論考は、さまざまな問題を抱える現代社会にこそ響いてくる。読み終える前と後で、創作物に対する見方が一変すること請け合の教材。

第10章 捨てない女―多和田葉子 3500字

ゴミと格闘する「わたし」の姿を描く、一見突拍子もない物語だが、文章内の多様な言葉遊びから筆者の創造力と言葉への熱い思いを読み解くことができる。類を見ない短編小説。海外でも注目される筆者の世界観に触れることができる。

第10章 魂込め―目取真 俊 14300字

「魂」を落とした者こそそれを戻してやる「魂込め」を軸に、沖繩の戦争の記憶、そしてそれが現在まで地続きであることを、臨場感あふれる筆致で描く。沖繩出身で、方言を用いた小説を書き続ける筆者だからこそ表現できる、方言と標準語とが絡み合った胸を打つ小説教材。

教材のポイント



第1章 小説とは何か—三島由紀夫 2400字

『遠野物語』が持つ、「あ、ここに小説があった」と言わしめる魅力とは何か。実体験のような感銘を与える小説の魅力を、短い文章の中に凝縮させた名文。『文学国語』第二部の冒頭教材としてぜひ触れておきたい。



第1章 陰翳礼讃—谷崎潤一郎 3300字

長く愛される定番教材。日本の伝統文化は、意識せずに料理と器、器とその空間との調和を追究してきたのではないか。モノと人間との関係という角度から、日本文化を見直す。



第1章 みづの上日記—樋口一葉 1500字

日本の女性職業作家の先駆けとして名を残す著者。この教材は最晩年に突如名声を獲得したときの日記の一部で、当時女性が創作活動をするのがいかに困難であったかが読み取れる。



第2章 舞姫—森 鷗外 16000字

大定番教材。書かれた時代背景を踏まえ、物語の展開はもちろん、語りの時制や文体など、それまでの小説と一線を画した実験性に富んだ書きぶりであることに注目したい。



第2章 靴—安部公房 2600字

「青年」と「私」がやり取りする「靴」とは、一体何を意味するのか。読み手の常識を揺さぶる寓意的な展開に、生徒たちの想像力が大きく膨らむ短編小説。創作やディスカッションの題材にもぴったり。



第5章 無常ということ—小林秀雄 2400字

歴史を「上手に思い出す」とはどのようなことか。近代文学において批評というジャンルを確立した著者による、鮮やかな筆致で読み手を思索へと誘う教材。著者ならではの表現を一つ一つ丁寧に読み取っていききたい。



第5章 骨とまぼろし—真木悠介 2900字

メキシコを題材に、固有の「社会」が持つ独自性を「メンティラ（うそ）」と「カラベラ（がいこつ）」という象徴から読み解いていく幻想的紀行文。異文化の考察にとどまらない、著者独特の想像の広がりに、思わず引き込まれる。



第5章 ある（共生）の経験から—石原吉郎 5000字

シベリア抑留を経験した詩人による凄烈な回想録。極限状態において、他者の存在が憎悪の対象であると同時に、生存に不可欠な伴侶であったことが切々と語られる。想像しえないものを、それでも自分に寄せて思いめぐらすことの重要さを、考えずにはいられない教材。

第6章 詩歌

新しい表現に挑戦し続ける現代詩から、「無題」（吉原幸子）「旅情」（石垣りん）「N森林公園の冬」（北村太郎）と俳句。



第3章 〈うだてき〉場所の言葉—吉田文憲 4100字

「ふるさと」とは、そこを一度離れた者にとってどのような場所と言えるか。詩人で、宮澤賢治の研究でも知られる著者が、独自の観点から方言を深く掘り下げ「ふるさと」の本質に迫る、読み応えのある教材。



第3章 絵画は紙幣に憧れる—榎木野衣 2700字

「社会」の中で価値がどのように創出されていくか、筆者は「絵画」と「紙幣」の比喩的な関係を明らかにしながら、近代芸術の特質を浮きぼりにする。模倣とオリジナルという観点から、価値の創出について考えを示し、文学的レトリックが駆使された文章。



第3章 隠れん坊の精神史—藤田省三 3400字

おとぎ話と隠れん坊は、子どもたちにとっていかなる意味を持つのか。誰にとっても身近なテーマだが、深い思索と重厚な語り口で、本質を突いていく展開は圧巻。



第4章 水仙—太宰 治 11500字

「自身の才能を信じてできなかった天才の悲劇」を描いた、著者ならではのテーマと文体が楽しめる小説。単なる「天才」論ではなく、誰にも通じる普遍的なテーマ（自己の「本分」とは何かをさまざまに思い悩む思春期特有の苦悩）を扱っている点でも、生徒たちの心を動かせるはず。



第4章 王国—津村記久子 9500字

幼児の持つ、大人が思いも及ばないほどの豊かな想像力の広がりをも、太宰治賞出身の著者が生き生きと描きます。物語を生み出すという行為が人間にとってある種の救いになるのではないかと、考えさせられる小説教材。



第7章 藤野先生—魯迅 4700字

中国から日本へと留学し孤独の中にいた著者に、期待を寄せてくれた一人の日本人教員。その記憶は著者にとって、後々まで困難を生きる糧となった。当時の時代背景を踏まえ読みを深めていききたい、定番の小説教材。



第7章 沈黙—村上春樹 18800字

他者を傷つける者、そしてそれに無責任に同調する者たち。語りの手法で一気に引きつける展開に、恐ろしくも引き込まれる小説教材。人間関係におけるある種の普遍性が、著者の言葉の力によってつまびらかとなる。



第8章 寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか—渡辺一夫 3100字

人間精神について思索を深め続けた文学者・渡辺一夫の語る「寛容を説く精神」の意義は、時間を経てより一層重要であると言わざるを得ない。高校卒業を間近に控えた時期に、触れる価値のある教材。



第8章 チャンピオンの定義—大江健三郎 5400字

「チャンピオン」という言葉には、「優勝者」「選手権保持者」という意味の他に、「闘うことのできない誰かの代わりに、その支持者・擁護者として闘う者」という意味もある。ノーベル文学賞受賞者である著者が、その定義を再発見することになったある事件を語る、奥深い随想。

単元の目標

この教科書は、それぞれの章に次のような学習目標があります。学習目標に注意して、見通しを持って学びましょう。

第1章 ことばから広がる世界 随想・評論(一) 

▼目標：豊かな認識へと導くことばに触れる

私たちはさまざまな境界線を引くことで世界を捉えている。自己と他者との境界もその一つである。ことばは、この境界を作り替え、自我を外界へと開く力を併せ持っている。越境の可能性を鮮やかに示した文章を味わい、文学の豊かな世界へと歩みを進めよう。

第2章 物語との出会い、小説(一) 

▼目標：小説から情景や心情を読み取る

不思議な世界との遭遇を描いた小説を通し、情景や心情を正確に読み取ろう。そして、小説ならではの豊かな表現と語彙を学び、自らも物語を書いてみよう。

第3章 背後にあるメッセージ 随想・評論(二) 

▼目標：身近な題材を取り上げ、問題を発見する

た。この問題を、日本近代文学を代表する作家・夏目漱石の作品を通して考えてみよう。

第6章 過去との対話 随想・評論(四) 

▼目標：生の軌跡をひもとき、現在のあり方を考える

過去の作品・資料・記録は、現在の社会のありようを振り返るための叡智に満ちている。過ぎた時間への思いにあふれた文章を味わい、矛盾や葛藤を含めて物事を伝えうる文学の力に触れよう。

第7章 世界観を築く 随想・評論(五) 

▼目標：世界の捉え方を明らかにする

感覚や考え方をことばにして伝えることは難しい。とりわけ、この世界をどのように捉えて生きているのかということは、自分で自分に問いかけながら明らかにしていかなければならない。自らの世界観に形を与えてくれることばや表現を探してみよう。

第8章 調べとリズム 詩歌 

▼目標：選り抜かれたことばの、洗練されたリズムを味わう

第4章 現実を揺さぶる想像力 随想・評論(三) 

▼目標：現実を多面的に捉える想像力を身につける

他人の視点に立ってみると、現実の新たな側面が見えてくる。自分とは異なる感じ方、人や物やことばとの関わり方の多様性を知ろう。そして、今まで自分が当然だと思っていたことを、複数の視点から捉え直してみよう。

第5章 自己と向き合う 小説(二) 

▼目標：「自己」を追い求める近代の特色について考える

近代というのは「ほかの誰とも違う自分」に徹底してこだわった時代である。それはまた、自己の中の未知の部分や「闇」と出会い、悩み苦闘してきた歴史でもあつ

第9章 思考の道筋をたどる 随想・評論(六) 

▼目標：柔軟に思考するための新鮮な着眼点を探る

円滑な社会生活を送るために常識は欠かせない。だが、常識だけで世界を理解するところに、新鮮な生き方があるだろうか。例えば、対極的に語られがちな科学と文学、知性と感性は必ずしも対立しない。既成概念を疑い、新たな思考の枠組みを作り出す着眼点を学び取ろう。

第10章 日常の裂け目 小説(三) 

▼目標：現実と非現実をつなぐ小説の深みを理解する

ことばによって作り出される虚構は、現実と隔絶されたファンタジーではなく、現実と非現実とが重なり合う波打ち際のようなものだ。虚構という手法によって現実を問い直そうとする小説を読み解き、そこにどのようなメッセージがあるか考察してみよう。

単元の目標

各単元の「目標」を第一部・第二部の冒頭に提示しました。単元ごとの学びの見通しに役立ちます。

「資質・能力」アイコン

各単元で主に身につけたい「資質・能力」を示すアイコンを章ごとにつけてあります。

●おすすすめの教材①

現代作家が放つ、文学の持つ「力」と「役割」を問う文章。
『文学国語』を学ぶ意義にまで思いを巡らすことができます。(第一部 第6章 過去との対話)

読者 第6章 過去との対話 随想・評論(四)

死者の声を運ぶ小舟

小川洋子 おがわようこ

◆用語◆ 文学にはどのような「力」があるか、筆者の主張を読み取ることも、例に挙げた作品を実際に読んで確かめてみよう。

広島の原爆の日は八月六日。長崎は八月九日。そして終戦の日が八月十五日。日本にとって八月は、死者を思う季節である。

本当なら、七五年めの原爆の日を、私たちは東京オリンピックの期間中に迎えるはずだった。しかし、新型コロナウイルスの蔓延によりオリンピックは延期され、思いがけない静けさの中で人々は、死者のために黙禱を捧げることになった。

一九六四年の東京オリンピック大会で聖火の最終ランナーを務めたのは、一九歳の、無名の陸上選手だった。その青年は、原爆投下の当日、広島で生を受けていた。真っ白いランニングシャツと短パンを身に着け、聖火台に続く長い階段を駆け上がる彼の姿は、実に清潔で、均整がとれ、全身に若々しさが満ちあふれていた。この映像を目にするたび、敗戦からわずか十九年で、世界中の人々が集まるスポーツの祭典が日本で催された、という現実が驚かされる。人類が経験したことのない徹底的な破壊の中から誕生した、一人の生命が、炎をなびかせながら、一段一段、火を運んでゆく。最終聖火ランナー選

出の裏に、政治的な意図が入り乱れていたとしても、広島で生まれた一九歳の青年が放つ生命力には、何のごまかしもなかった。

核兵器廃絶の理想は実現しないままに、やがて、若い肉体が復興の証となる時は過ぎ去っていった。世界で唯一の被爆国として、核兵器の非人道性を訴えてゆくことの難しさに、日本は直面し続けてきた。その難しさは年々、複雑さを増しているように思える。二〇一五年、NHK放送文化研究所が行った原爆意識調査によれば、広島原爆投下の年月日を正確に答えられた割合は、広島市で六九%、長崎市で五〇%、全国では三〇%にとどまったという。忘却の壁はどんどん高くなってゆく。そう遠くない未来に、被爆した人から直接話を聴ける時代は終わりを迎える。

体験者の世代で記憶を途切れさせず、体験していない者がどうやってそれを受け継いでゆくか。二度と繰り返してはならない重大な過ちを犯した時、人類は繰り返し、記憶の継承という問題に立ち向かってきた。数々の戦争、ホロコースト、チェルノブイリ、フクシマ……。もちろんヒロシマ・ナガサキも例外ではない。

自分が生まれる前、遠いどこかで起こった無関係なはずの事実を、単に知識として得るだけでなく、直接の体験と同様に自らに刻み込み、記憶の小舟に載せて次の世代につなげてゆく。この困難を乗り越えるためには、政治や学問の助けだけでは足りない。な

1 新型コロナウイルスの蔓延 新型コロナウイルスの蔓延 新型コロナウイルスの蔓延 SARS-COV-2 の感染によって引き起こされた急性呼吸器疾患 (COVID-19) の世界的流行のこと。二〇一九年十一月、中国湖北省武漢市で感染が初めて確認され、世界に広まった。

視点

身につけたい資質・能力について、学びの見通しを立てやすくするため、すべての教材の冒頭に掲載しています。

1 「何のごまかしもなかった」とはどのようなことか。

2 NHK放送文化研究所 東京都港区にある、日本放送協会(NHK)の放送研究機関。

3 ホロコースト 一九三三年から四五年にかけて行われたナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺のこと。[英語] the Holocaust

4 チェルノブイリ 一九八六年、旧ソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原子力発電所で発生した原子力事故をさす。

5 フクシマ 二〇一一年、東北地方太平洋沖地震により発生した福島第一原子力発電所の原子力事故をさす。

〔蔓延〕(黙禱)

脚注

文章を理解する上で必要な情報を掲載。

ぜなら、他人の記憶を共有するなど、全く非論理的な足掻きだからだ。

ここで文学の力が求められる。理屈から自由になり、矛盾を受け止める必要に迫られた時、人は自然と文学に心を寄せるようになる。文学の言葉を借りてようやく、名前も知らない誰かの痛みに共感できる。あるいは、取り返しのつかない過ちを犯してしまう人間の、愚かさの影が、自らの内にも潜んでいないか、じっと目を凝らすことができるのだ。

私自身、『アンネの日記』や『夜と霧』(V・E・フランクル)や『これが人間か』(プリーモ・レーヴィ)を幾度となく読み返すことで、ナチスドイツ時代を生きた人々の声に、耳を澄ましている。アンネ・フランクにより、たとえ隠れ家に閉じ込められていようとも、人は成長できるという尊い事実を教えられ、フランクルの「すなわち最もよき人々は帰ってこなかった。」の一文に、強制収容所を生き延びた後に続く苦悩の果てしなさを感じ取った。そんなふうには、今の自分と、自分が存在しない時間がつながった時、人生に新たな地平が拓けるのを実感した。

そしてまた日本文学も、原爆を描き続けている。小説、詩歌、戯曲、ルポルタージュ等々、あらゆるジャンルで原爆というテーマは、特別な場所を占めている。一九六二年生まれの私にとってなじみ深いのは、例えば、不思議な喋る椅子に導かれ、日めくりカレンダーが六のまま止まった家で、二人の少女が時を超えて交差する童話『ふたりのイ

ーダ』(松谷みよ子)。原爆の後遺症の無残さを描き、日本の文学史には決して欠くことのできない小説となっている『黒い雨』(井伏鱒二)。デビューして間もない二〇代の大江健三郎が広島を訪れ、過酷な日々を忍耐し続ける被爆者たちに、最も人間的な威厳を見出だしてゆくさまを記したレポート『ヒロシマ・ノート』……。挙げてゆけばきりが

ない。

ここでどうしても取り上げたい小説がある。教科書にも載るほど、日本では大事に読み継がれている、原民喜の『夏の花』¹³。体験者によってまさにその時が記された小説だ。一九〇五年、広島市生まれの原は文芸誌に詩や小説を発表する生活の中、一九四四年に妻と死別し、関東での生活を切り上げ、四五年の二月、広島に一人帰郷。「まるで広島島の惨劇に遭ふために移つたやうなものだつた。」と自ら書いておるとおり、当日、実家のトイレに入っている時、その瞬間を迎える。幸い大きな怪我を免れた原は、手帳にメモを取りながら、燃え盛る広島町の町を逃げ惑う。この記録がのちに『夏の花』となる。小説は原爆投下の前々日、妻の墓参りの場面からはじまる。水を掛け、夏の花を飾った墓は主人公の目に清々しく映る。人生の支えであった最愛の妻の死と、二日後に彼が目にするおびただしい数の死が、同じ死という言葉におさまりきらず、引き裂かれてしまふ予感が、書き出しのページに悲しく漂っている。

6 『アンネの日記』 ユダヤ系ドイツ人の少女アンネ・フランク (Annelies Marie Frank 一九二九—四五年) の日記。ナチスの迫害から逃れ、隠れ家で過ごした二年間をつづつたもの。

7 『夜と霧』 オーストリアの精神科医でユダヤ人のV・E・フランクル (Viktor Emil Frankl 一九〇五—一九七七年) が一九四〇年に発表。自らの強制収容所体験を伝えた。

8 『これが人間か』 イタリヤの作家・化学者でユダヤ人のプリーモ・レーヴィ (Primo Levi 一九一九—一九七七年) が一九四七年に発表。自らの強制収容所体験をつづつた。

9 ルポルタージュ 現地からの報告。またその記事や映像。「フランス語」reportage

10 『ふたりのイーダ』 一九六九年刊。児童文学作家の松谷みよ子 (一九二六—二〇一五年) による児童文学作品。

11 『黒い雨』 一九六六年刊。小説家の井伏鱒二 (一九八—一九九三年) による広島原爆を扱った記録的小説。

12 大江健三郎 一九三五年—。小説家・評論家。四六九ページ参照。「ヒロシマ・ノート」は、一九六五年刊。

13 『夏の花』 小説家・原民喜が一九四七年に発表。

14 なぜ「同じ死という言葉におさまりきらないのか」(後遺症) (威厳) *心を寄せる

重要語句

覚えておきたい熟語や成句・慣用句は見開きごとに整理。

脚注

文章を理解する上で必要な情報を掲載。

文学論であると同時に平和教材としても読むことができます。

川を目指して避難する主人公の様子を、作者は冷静に細やかに描写してゆく。簡潔な文章には、感情を表す言葉が見当たらない。かつて誰一人目にしたことのない、生々しい現実だけが次から次へと主人公の前に立ち現れ、感情などというあいまいなものを飲み込んでしまうのだ。

男か女か区別もつかないほどに腫れ上がった顔。全体が黒豆の粒々で出来上がっているような黒焦の頭。「水をくれ、水をくれ。」と狂いまわる声。「お母さん、お父さん。」とかすかに静かな声とともになされる合掌。死体から剥ぎ取られる形見の爪とバンド……。死臭に満ちる町は、こんなふうには描写されている。「……銀色の虚無のひろがりの中に、路があり、川があり、橋があった、そして、赤むけの膨れ上がった屍体がどこどこに配置されていた。これは精密巧緻な方法で実現された新地獄……。」

人間的なものを根こそぎ奪うのが原子爆弾なのだと思えば、この時、言葉も燃え尽きてしまったのかもしれない。しかし何ものかの導きか、原が避難するのに持ち出した非常用の鞆の中には、食料や医薬品と一緒に手帳と鉛筆が入っていた。彼が記したのは、単なる言葉ではない。死に行く者や、死者たちから発せられる、到底言葉にはできない何かを聴き取った印だ。無言のまま去っていかねばならない人々が、確かにここに存在したという証となる痕跡だ。

妻を病で亡くし、孤独の中で原爆に遭った原の創作の礎には、いつも死者たちの無言

があった。広場の真ん中に立ち、社会に向かって大きな声で物申すのではなく、言葉を奪われた者の声なき声を言葉にする、という矛盾に黙々と耐えた作家、詩人だった。

原の書いた、『コレガ人間ナノデス』という短い詩がある。怒りや恨みを超え、人間とは思えない姿になってしまった人のか細い声を、ただそっと抱き留める詩だ。

コレガ人間ナノデス
原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨脹シ
男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル
オオ ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「助ケテ下サイ」
ト カ細イ 静カナ言葉
コレガ コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

これを読む時、ナチスの強制収容所から生還したイタリア人化学者、プリーモ・レー

③「言葉も燃え尽きてしまった」という表現にはどのような効果があるか。

脚問

文脈を理解する上でポイントとなる部分は簡潔な脚問を通して確認。

〔虚無〕〔礎〕
〔滅茶苦茶〕

著者紹介の末尾には、より深く学びたい生徒のために、著者の代表的著作を紹介して、読書活動に配慮しました。

読みやすさに配慮したユニバーサルデザインフォントを採用しています。

ヴィの『これが人間か』を思い出さずにはいられない。冒頭、こんな問いが掲げられている。

これが人間か、考えてほしい

泥にまみれて働き

平安を知らず

パンのかけらを争い

他人がうなずくだけで死に追いやられるものが。

私には、互いを知るはずもなかったはずのレーヴィと原、二人の言葉が呼応し合っているように感じられる。ある者は、これが人間か、と問い、ある者は、これが人間なのです、と答える。人間らしくあろうともがく者と、人間らしさを見失うまいとする者が、文学の言葉を通して一つに重なり合い、未来にまで届く思いを響かせている。文学の世界では、単なる無意味な偶然、で済ませられてしまうものの中に、最も大切な真理が映し出される。文学の助けにより、死者の言葉が小舟にすくい上げられ、真実の川を連な

って流れてゆく。

偶然、ということ言えば、原民喜は一九五一年、プリーモ・レーヴィは一九八七年、生き残った者の使命を果たし終えた、と自ら悟ったかのように、ともに自死している。

今、私の手元に、¹⁴ 広島平和記念資料館の収蔵品を撮影した写真集『Hiroshima Collection』（撮影土田ヒロミ）がある。中学一年生、折免滋君の弁当箱と水筒の写真を見つめている。滋君は動員学徒として作業中に、爆心地から五〇〇メートルで被爆。川の土手に積み重ねられた遺体のカバンから、お母さんがこれを発見した。「今日は大豆ご飯だから、昼飯が楽しみだ。」と言って出かけたという。弁当箱は歪み、蓋には穴が開き、中身は真っ黒に炭化している。

この小さな箱には、息子を思う母親の愛情と、質素な大豆ご飯を楽しみにしていた少年の無邪気さが詰まっている。たとえ原爆の体験者が一人もいなくなっても、弁当箱が朽ちて化石になっても、小さな箱に潜む声を聴き取ろうとする者がいる限り、記憶は途絶えない。死者の声は永遠であり、人間はそれを運ぶための小舟、つまり文学の言葉を持っているのだから。



小川洋子 一九六二（昭和三七）年―。小説家。岡山県に生まれた。一九九〇年『妊娠カレンダー』で芥川賞、二〇〇四年『博士の愛した数式』で読売文学賞・木屋大賞受賞。この作品は二〇二〇年発行の『The New York Times Magazine』に掲載され、本文はその日本語版によった。

◆主な著作 『シュガータイム』『沈黙博物館』『ミーナの行進』など。

¹⁴ 広島平和記念資料館 広島市の平和記念公園敷地内にあり、原子爆弾による広島市の被害を示す資料を展示している。
¹⁵ 土田ヒロミ 一九三九年―。写真家。『Hiroshima Collection』は一九九五年刊。写真は前見返しを参照。

一（呼応）

読む 学習

「理解」「表現」の二項目に分けて、本文の理解を補助します。

学習の手引き

本文中の常用漢字より、重要な漢字は、教材ごとに整理。

重要漢字

- 理解…
 - (1) 広島・長崎の原爆の日、終戦記念日に関する新聞や雑誌などの記事を調べ、現代の課題についてまとめなさい。
 - (2) そう遠くない未来に、被爆した人から直接話を聴ける時代は終わりを迎える。(一五・一・八)とはどのようなことか、説明しなさい。
 - (3) 「非論理的な足掻き」(一五二・一)とはどのようなことか、説明しなさい。
 - (4) 折免滋君の弁当箱と水筒の写真(一五七・三)から著者はどのようなことを感じ取ったのか、説明しなさい。
 - (5) 「死者の声は永遠であり、人間はそれを運ぶための小舟」(一五七・一)とはどのようなことか、説明しなさい。
- 表現…
 - (1) 本文中に例として挙がっている文学作品の中から一冊を選んで読み、感想を八〇〇字程度でまとめてみよう。
 - (2) 本文は「The New York Times Magazine」紙に英語で発表された。本文を英語で語る意義について話し合ってみよう。

重要漢字……

- 150 炎 (胃炎) 151 核 (核心) 151 被 (被害) 152 尊 (尊大) 152 戯 (遊戯) 153 遺 (遺産) 153 症 (症状) 153 酷 (酷使)
- 153 怪 (怪盗) 154 緻 (精緻) 154 痕 (血痕) 154 孤 (孤軍) 155 還 (帰還) 156 掲 (掲示) 157 蓋 (天蓋) 157 朽 (老朽)

読解の窓

亡くなった人たちの声に耳を傾ける

「死者の声を運ぶ小舟」は、アメリカによる広島や長崎への原子爆弾投下によって亡くなった、無数の人々の声をめぐる問題を扱ったエッセイである。原爆は街を一瞬のうちに破壊し、広島ではおよそ一二万人、長崎では約七万人が被爆から数か月のうちに亡くなったと言われている。犠牲者の膨大な数を強調して悲惨さを訴えると、今度はひとりひとりの声が聞こえなくなる。何万人であろうとも、ひとりひとりそれぞれに顔があり、生活があり、家族があった。

調査をし、被害報告をすることは重要だが、それだけではひとりひとりの声は聞こえてこない。生きのびた人たち、経験者の証言や聞き書き、記録が、まずその声を書きとめた第一次の記憶媒体となる。しかし、やがて当事者の生の声を聞くことができなくなるときが来る。そのとき、経験されたことは消えて失われてしまうのだろうか。

文学が伝えるのは当事者の生の声だけではない。声にならなかったことは、それでも伝えようとする思いを、想像力によって補い、まったく同じでないながらも言語化して懸命に届けようとする。そこに文学の力と役割を期待できるのではないか。

読解の窓

『文学国語』の学習に必要な知識や、主体的・対話的で深い学びへと誘う解説を掲載しました。

●おすすめの教材②

文学を学ぶとは、ことばを学ぶこと、人を学ぶことであると、筑摩書房は考えています。文学の本質を問いかける文章です。(第一部 第七章 世界観を築く)



第7章 世界観を築く 随想・評論(五)

未来をつくる言葉

ドミニク・チェン

〈視点〉コミュニケーションと翻訳についての筆者の考えを理解し、文学作品を読む視点を身につけよう。

幼い頃から、日常生活を「翻訳」が満たしていた。家庭や学校で飛び交う複数の言語間で、時には言葉で表現する喜びに打ち震え、時には口から言葉が出てこないもどかしさに身悶えすることもあった。

ある時から、言葉を吐くという何気ない些細なコミュニケーションのひとつひとつが翻訳行為なのだと思うようになった。そこから、人の話を聞いたり、本を読んだりすることがさらに好きになった。誰が何語で話してようと、内容そのものへの興味に加えて、当人が「何を翻訳しようとしているのか」というプロセスにも関心を持つようになったのだ。

ある人が任意の言語で話している時、その人は自分の体験を通じて感じたことを、相手の知っている言葉に「翻訳」して話している。同時に、その翻訳行為から常にこぼれ落ちる意味や情緒もある。その隙間をなんとか埋めようとする仕草に、翻訳する人に固有の面白さが現れる。

1 プロセス 過程。経過。手順。[英語] process

1 「その隙間」とは何と何の間の隙間か。

●おすすめの教材③

文学を通して、思考を深め、世界を広げてゆきたい。渡辺一夫のこの文章こそ、『文学国語』として読み解くにふさわしい教材です。(第一部 第8章 未来を問う)

読む 第8章 未来を問う 随想・評論(四)

寛容は自らを守るために

不寛容に対して不寛容になるべきか

わたなべかずお
渡辺一夫

〈視点〉文学者として思索を深めてきた著者の、慎重にことばを選び紡ぎ出す姿勢に学び、文学作品の読解に生かそう。

過去の歴史を見ても、我々の周囲に展開される現実を眺めても、寛容が自らを守るために、不寛容を打倒すると称して、不寛容になった実例をしばしば見出だすことができる。しかし、それだからと言って、寛容は、自らを守るために不寛容に対して不寛容になってよいというはずはない。割り切れない、有限な人間として、切羽つまった場合に際し、いかなる寛容人といえども不寛容に対して不寛容にならざるを得ぬようなことがあるであろう。これは、認める。しかし、このような場合は、実に情ない悲しい結末であって、これを原則として認肯定する気持ちは僕にないのである。その上、不寛容に報いるに不寛容を以てした結果、双方の人間が、逆上し、狂乱して、避けられたかもしれぬ犠牲をも避けられぬことになったり、更にまた、怨恨と猜疑^{さいぎ}とが双方の人間の心に深い褶^{ひだ}を残して、対立の激化を長引かせたりすることになるのを、僕は、考えまいとしても考えざるを得ない。したがって、僕の結論は、極めて簡単である。寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容たるべきでない、と。繰り返して言うが、この場合も、

10

5

●おすすめの教材④

海外で活躍し、日本でも人気の小説家による、浮遊感あふれる小説。小説を読み解く力を深め、養います。(第一部 第10章 日常の裂け目)

読む 第10章 日常の裂け目 小説(三)

捨てない女

たわだよしこ
多和田葉子

〈視点〉ゴミと格闘する「わたし」の姿から何が見えてくるか。比喩と創造力が生み出すことばの広がり味わおう。

生活廃棄物処理法が改正されてから、わたしの生活もずいぶん変わった。それまでは、書き損じた原稿用紙は束にして毎週月曜日に「もえるゴミ」として、近所のゴミ捨て場へ持っていけばよかった。これは、恥ずかしくてあまり人に話したことはないが、わたしは「もえるゴミ」という言い方が、捨てられる者の燃える情熱を表しているようで、なんだか好きだった。ここ十年ゴミが増え過ぎて、税金だけでは処理費が賄えなくなってきたため、粗大ゴミだけでなく、どんなに小さなゴミでも百グラム百円の処理費を払って引き取ってもらうことになってからは、もう気軽に小説の筋を変えることもできなくなってしまった。わたしは「処理[■]」という言葉が好きになれない。排泄物^{はいせつぶつ}を処理し、性欲を処理し、人づきあいを処理し、中古品を処理しながら前へ進んでいく毎日では味^{*}気ない。どうせなら、燃えるゴミとなって生命力を燃焼させ、火の玉となって死後も空中に漂い続けたい。

5

10

1 生活廃棄物処理法 架空の法律。実際に法制化されたのは「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」(一九七〇年成立)で、一般に「廃棄物処理法」と呼ばれる。

■ 「処理」という言葉が好きになれないのはなぜか。

それにしても百グラム百円は高い。短編をひとつ書くにも、着想をメモしたり、図書

●おすすめの教材⑤

小説とは、社会や人間の深部を掘り下げ、心の深くに訴えるもの。そのことを実感させてくれる作品です。〈第一部 第10章 日常の裂け目〉

魂込め

公民館の方からラジオ体操の音楽が流れてくるのを鼻で

笑い、ウタは開けはなした座敷の濡れ縁に座ると、朝露に濡れた庭の緑が陽の光を受けてあざやかさを増していくのを眺めながら黒砂糖をひとかけ口にふくみ、熱い茶をすすった。昔から、朝起きたらまずはお湯を沸かし、熱い茶で体をあたためてから年寄は体を動かすものだと言えられてきたのに、村の教育委員会と老人会の役員が、やれお年寄りと子供たちの交流だの、やれ早寝早起き運動への協力だのと言いだし、老人会と子供会の合同ラジオ体操を公民館前の広場でやりだしたのは、四月のはじめだった。それから一月ばかりたち、似合いもしない運動着を着て楽しげに通う老人会の仲間にごんごんに誘われても、ウタは「我ね行

1 ラジオ体操 一九二八年に始まり、現在も行われているNHKラジオのラジオ体操。一九四五年までは国民体操として普及していた。 2 我ね行かん 私は行かない。

目取真俊

かん。」と一言いって朝の茶を守りつづけた。

ラジオ体操は最初は公民館の屋根にすえつけた大型のスピーカーで流していた。そのあまりのうるささに公民館の事務所にどなりこんだウタを、子供会会長の川上という野球帽をかぶった小太りの中年男は、笑って眺めるだけでありあおうとしなかった。ウタは家にとって返すと軒下にかけた鎌を取り、子供たちが体操をしている広場の真ん中を突きつって、スピーカーにつながる電線を切るために電柱をよじ登りはじめた。川上はあわててスイッチを切り、以来ラジオからじかに流すことになった。朝の静けさの中で耳障りなことに変わりはなかったが、子供たちの手前ウタもそのあたりで妥協することにした。

1945年までは国民体操として

linkマーク

『文学国語』でもlinkマークのある教材は、インターネット上に参考資料があります。教科書「凡例」ページのQRコードもしくはURLを開くと、小社ホームページの「参考資料一覧」に遷移し、各種参考資料へのリンクが掲載されています。

文学国語



●おすすめの教材⑥

詩歌は、近代から現代まで、幅広く採録しました。〈第二部 第6章 詩歌という隣人〉

読む 第6章 詩歌という隣人 詩歌

無題

風 吹いてゐる
木 立ってゐる

ああ こんなよる 立ってゐるのね 木

風 吹いてゐる 木 立ってゐる 音がする

よふけの ひとりの 浴室の

せっけんの泡 かにみたいに吐きだす にかいあそびぬるいお湯

なめくち 匍^はつてゐる

浴室の ぬれたタイルを

吉原幸子

〈視点〉ありふれたことが詩になるとき、そのよくな眺めが広がるのか。現代詩を味わいながら、ことばの可能性を拓いてみる。

5



読む 実践③：「編集」という表現方法を楽しもう

気に入った文章や作品を選んで編んだ文集を「アンソロジー」という。文章や作品の選び方には、編む人の読んだ本や個性が反映されるので、「編む」ということ自体、ひとつの表現である。作品の選択や配列を吟味して、オリジナルのアンソロジーを作ってみよう。

レッスン

アンソロジーを作ろう

- ① グループに分かれ、アンソロジーのテーマを考えよう。
- ② 掲載作品を選ぼう。読んだことがある作品だけでなく、図書館や書店で新たな作品を探してみよう。
- ③ 掲載候補作品の、タイトル・筆者名・出版社名をリストアップしよう。書籍の該当部分に付せんを貼るか、作品のコピーを取ったり、書き写したりしよう。
- ④ グループ内で候補作を互いに読み合い、どの作品を載せるか話し合おう。
- ⑤ 作品が決まったら配列をし、一冊にまとめよう。読者に魅力が伝わるよう、並べ方にも工夫をしよう。

アドバイス

- ・ 作品で特に印象に残った部分を抄出した「名文集」にしてもよい。
- ・ 掲載作品にバラエティを持たせよう。たとえば、小説・詩歌・童話・評論・ノンフィクション・翻訳など幅広いジャンルから選んだり、著者の性別や時代、国などにも意識を向けたりしよう。
- ・ グループ内で候補作を読み合い、話し合うことが、編集作業の中心となる。作品を比較したり、意見を出し合ったりすることから学ぶことは多い。
- ・ 国語の教科書もアンソロジーの一種と言える。ほかにもどのようなアンソロジーがあるか探して、編者の選択眼や目次の配列など、自身の参考にしよう。

●小説のポイント

「第一部 第2章」のあとに、「小説のポイント」を掲載。小説を理解するコツをまとめました。

小説のポイント

1 設定と展開を整理しよう

ときに人を慰め、未知の体験に誘い、人生を変えることすらある小説。そんな小説を生み出すためには、作品との豊かな出会いが大切だ。ここでは小説を理解するポイントを確認しよう。

まずは作中人物の年齢・性別・職業・性格などの特徴をもとに人物像を立ち上げよう。親子・友人・恋人などの人物相互の関係もつかんでおこう。なかでも、時代や場所など、出来事の背景となる設定を理解しておくことが極めて重要である。そのうえでどの場面で人物や人間関係が変化していくのか、物語がどのように展開していくのかを追いたい。場所や時間の変化、作中人物同士の行為や会話などに目を向けることで、物語の展開がはつきりと見えてくるはずだ。

また、物語は必ずしも出来事が起こった時系列に沿って展開するとは限らない。作中人物の回想や心情表現の挿入、時間の変化や場所の移動などにも注意を払おう。

特定の作中人物だけでなく、他の人物の視点からも出来事を見直してみよう。思わぬ部分が見えてくると、その小説への理解が深まるに違いない。

5W1H

When (いつ)
Where (どこで)
Who (だれが)
What (なにを)
Why (なぜ)
How (どのようにしたのか)

●場面設定

(時間・空間)



いつ？
どこで？

●作中人物の設定

(年齢・性別・職業・性格など)



だれが？
だれと？

●物語の展開

(時間の経過・会話・心情の変化・未知の事象との遭遇・行為など)



なぜ？
どのようにしたのか？

古典探究

古典が培う普遍的なことばの力強さと繊細さに
目を開かせる、「探究」の名にふさわしい
伝統と革新の古典教材。



青山学院大学
高田祐彦(古文編)

編集委員のことば

古典が私たちにとって意義を持つのは、現在とは異なるその独自性と、現在にも深くつながってくる普遍性のゆえである。古典学習においては、何よりもこの両面を意識することが重要になる。そのためには、古典のことばそのものの力を感じつつ、作品世界の投げかけるものに深く思考をめぐらすことができるような良質の教材が不可欠となる。『古典探究』は教科名こそ新しいが、基本的な枠組みとしてはこれまでの筑摩書房版『古典B』と大きく変わるところはなく、名称どおり一段と深く古典の世界を「探究」するものと捉え、従来支持を受けてきた定番教材や構成を十分に生かしながら、さらなる掘り下げをおこなった。その一方、意欲的に新しい教材も加えることにより、古典「探究」にふさわしい幅広さも獲得できるよう、種々工夫してみた。これまでも、筑摩書房編集委員会では、単なる古文の学習にとどまらず、日本古典の世界を深く広く把握できるように教科書作りをおこなってきたが、そうした革新の伝統を受け継ぎながら、生徒たちが豊かな古典の世界に分け入る良質の手引きを作ることができたと確信している。



山形大学
三上英司(漢文編)

揺るがないことばに触れる機会を作りたい、『古典探究』「漢文編」の作成に携わった者一同の思いは、ここにあります。目前の要求に右往左往する度合いが増加する現代社会で、自らの精神的安定を確保して豊かな人生を送るためには、確固たる自我を構築しなければなりません。二千年を超える時代の変化にも流されず、現代に普遍的な真理を伝えることばたちは、自己を形成する途上にある高校生にとって、自らを映し出す明鏡となり、自らの航路を確認する灯台ともなります。古典文学の役割が現代以上に重要性を持った時代は、おそらくこれまでなかったでしょう。

本教科書では、高校生の学びが自覚的に進むように「単元の目標」の項で、具体的にコンピテンシーベースの学習目標を明示しました。そして、目標達成のために各単元に配置した教材群は、奇を衒うことなく、高い評価の定まった「古典中の古典」を選びました。学習者の皆さんが、変転激しい社会でこそ価値を増す揺るがぬことばの力に触れ、自らの感性を広げ、思考力を高め、効果的な表現力を磨く機会として、本『古典探究』「漢文編」を活用してくださることを切望しております。

古典探究 (古探 715 / 716) 編集のポイント

- 古典を学ぶにあたって必須の教材を柱とし、さらに探究を深める工夫を凝らしました。
- 生徒の興味関心を広げ、先生方の教材選択の幅を広げるために、豊富な教材数を収録しました。

《教材の特徴》

- ① 使いやすい古文編・漢文編の分冊構成。
- ② 古文編は第一部〈9単元・散文49教材・和歌39首・俳諧12句〉、第二部〈10単元・散文41教材〉。
漢文編は第一部〈7単元・散文20教材・漢詩12首〉、第二部〈7単元・散文24教材・漢詩8首〉と充実のラインナップ。

《授業を支える工夫》

- ① 「第一部」「第二部」の冒頭に学びの見通しを立てるために役立つ「単元の目標」と教材ごとの「視点」を提示。
- ② 教材ごとに学びを深める「理解」と「表現」を提示。
- ③ 比べ読みの練習に、「参考」の文章を適宜掲載。
- ④ 主体的な学びを支える「実践」を適宜掲載。

古典探究 編集委員

- 東 俊也 武蔵高等学校中学校
- 井島正博 東京大学
- 大橋賢一 北海道教育大学旭川校
- 小田健太 早稲田大学高等学院
- 木下華子 東京大学
- 高田祐彦 青山学院大学
- 千野浩一 筑波大学附属駒場中・高等学校
- 三上英司 山形大学
- 吉田幹生 成蹊大学

古典探究・古文編

目次

● 古文教材は、第一部9単元
 散文49教材・和歌39・俳句12句。
 ● スタンダードな教材をバランスよく配列。

目次 古探715
 A5判320ページ

古文編……第一部

単元の目標……………10

第1章 生き生きと描かれた人々——説話

- 宇治拾遺物語 袴垂、保昌にあふこと(巻第二)……………12
- 獵師、仏を射ること(巻第八)……………15
- 古今著聞集 刑部卿敦兼の北の方(巻第八)……………18

第2章 歌に思いを託す——物語(一)

- 伊勢物語 初冠(第一段)……………20
- 月やあらぬ(第四段)……………22
- 行く虫(第四五段)……………24
- 狩りの使ひ(第六九段)……………25
- 渚の院(第八二段)……………28
- 小野の雪(第八三段)……………31
- とみの文(第八四段)……………33
- つひにゆく(第一二五段)……………34
- 姨捨(第一五六段)……………35
- 大和物語 鹿の声(第一五八段)……………38



第3章 豊かな感受性、深まる思考——随筆(一)

- 枕草子(一) 春は、あけぼの(第一段)……………40
- 野分のまたの日こそ(第一八九段)……………42
- 新 文ことばなめき人こそ(第二四四段)……………43
- 世の中になほ
- いと心憂きものは(第二四九段)……………44
- すさまじきもの(第二三段)……………45
- 中納言参りたまひて(第九八段)……………47
- 二月つごもりごろに(第一〇二段)……………48

＜コラム＞敬語法……………50
 読書案内……………51

第4章 人と人が織りなす世界——物語(二)

- 堤中納言物語 新 虫めづる姫君……………52
- 落窪物語 落窪の君(巻の一)……………56
- 源氏物語(一) 光源氏の誕生(桐壺巻)……………60
- 飽かぬ別れ(桐壺巻)……………64
- 廃院の怪(夕顔巻)……………67
- 若紫の君(若紫巻)……………71

第5章 体験を語る——日記

- 更級日記 継母との別れ……………76
- 源氏の五十余巻……………78
- 蜻蛉日記 嘆きつつ(上巻)……………81
- 道綱鷹を放つ(中巻)……………83

第6章 人と社会を見つめる——随筆(二)

- 徒然草 大事を思ひ立たむ人は(第五九段)……………86
- 世に語り伝ふること(第七三段)……………88
- 新 筑紫に、なにがしの
- 押領使など(第六八段)……………90
- これも仁和寺の法師(第五三段)……………91
- 九月二十日のころ(第三二段)……………93
- 久しく隔たりて
- 会ひたる人の(第五六段)……………94
- 新 安元の大火……………96
- 養和の飢饉……………99



古文の理解を深めるアクティブ・ラーニング例としての「実践」。

第7章 歴史を語る——物語(三)

- 大鏡(一) 雲林院にて(序)……………102
- 花山院の出家(花山院)……………105
- 公任、三船の誉れ(頼忠)……………109
- 南の院の競射(道長上)……………111
- 忠度の都落ち(巻第七)……………113
- 能登殿の最期(巻第一)……………117
- 新 千早城の戦い(巻第七)……………121

第8章 身体とことば——芸能

- 風姿花伝 二十四、五……………124
- 難波土産 虚実皮膜の間……………126
- 謡曲 新 忠度……………128
- 実践 芸能の中に生きる古典文学を味わおう……………131
- ＜コラム＞日本の芸能……………132

第9章 定型の力——和歌・歌謡・俳諧

- 万葉の歌……………134
- 王朝の歌……………137
- 中世の歌……………142
- 近世の句……………146
- おらが春……………148
- 愛児さと……………148

古文の理解を深めるコラム。

古典探究・古文編

目次

● 第二部 散文41教材。

古文編……第二部

単元の目標……………152

第1章 市井の人々の姿——説話

今昔物語集 新 鷲にさらわれた赤子(巻第二六)……………154

新 賀茂の祭りを

見物する翁(巻第三二)……………157

第2章 宮廷社会に生きる——随筆

枕草子(二) 新 里にまかてたるに(第八〇段)……………160

上にさぶらふ御猫は(第七段)……………163

第3章 長編の魅力——物語(一)

源氏物語(二) 車争ひ(葵巻)……………168

心づくしの秋(須磨巻)……………172

母子の別離(薄雲巻)……………177

暁の雪(若菜上巻)……………180

萩のうは露(御法巻)……………186

霧の中のかいま見(橋姫巻)……………190

髪(総角巻)……………193

『源氏物語』の虚構 鈴木日出男……………198



第4章 自己を語る——日記

紫式部日記 土御門殿の秋……………206

和泉式部と清少納言……………208

夢よりもはかなき世の中を……………210

建礼門院右京大夫集

なべて世の……………213

十六夜日記

関の藤川……………215

第5章 文学を論じる——評論(一)

古今和歌集仮名序 やまとうたは……………218

六歌仙……………219

俊頼髓脳

連歌……………221

無名抄

おもて歌……………223

毎月抄

心と詞……………225

無名草子

紫式部……………228



第6章 歴史を紡ぐ——物語(二)

大鏡(二) 菅公配流(時平)……………230

宣耀殿の女御(師尹)……………235

中宮安子の嫉妬(師輔)……………237

肝試し(道長上)……………240

道長、栄華への第一歩(道長上)……………244

後鳥羽院(第一「おどろのした」)……………248

隠岐配流(第二「新島守」)……………250

第7章 新たな表現を模索する——俳論・俳文

野ざらし紀行 千里に旅立ちて……………252

去来抄 行く春を……………254

岩鼻や……………256

北寿老仙をいたむ……………258

鶉衣 奈良団扇……………260

比べ読みに最適な【参考】教材。

新

【参考】日本武尊の死(日本書紀)……………285

【実践】二つの伝承を読み比べて、表現の違いについて考えよう……………287

倭建命(中巻)……………280

まとめ 古文の表現……………288

〈コラム〉上代のことば……………294

古典文法要覧……………302

古語の理解……………306

日本古典文学史……………312

『源氏物語』年立……………316

皇室・藤原氏略系図……………319



単元の目標

この教科書は、それぞれの章に次のような学習目標があります。学習目標に注意して、見通しを持って学びましょう。

第1章 生き生きと描かれた人々——説話

▼目標：話の展開を捉え、登場人物の心情を理解する

古典作品の中でも、説話は、比較的短くまとまった中に話が展開する。テンポの良い語り口の話を的確に読み取り、説話の面白さを味わいたい。登場人物の心情や思考を理解することで、現代にも共通する人々の姿勢や考え方に触れられるだろう。

第2章 歌に思いを託す——物語(一)

▼目標：歌物語の表現の特徴を理解し、物語を解釈する

歌物語は、和歌を中心に構成された物語である。和歌がよみだされるまでの物語の展開や心情の推移に注意して、和歌に込められた登場人物の心情を読み取っていく。物語における和歌の役割にも注意しよう。

第3章 豊かな感受性、深まる思考——随筆(一)

▼目標：作品に表現された心情を読み取る

平安時代の日記文学では、自分が経験した出来事を語る中に、作者の人生が描き出されている。語られた出来事は作者にとってどのような意味を持っていたのだろうか。登場する人物は作者にとってどのような存在だったのだろうか。それらのことに留意し、作者の心情を読み取る。

第6章 人と社会を見つめる——随筆(二)

▼目標：時代背景とともに作者の論理・思考を読み取る

平安時代末から鎌倉時代、南北朝・室町時代は、多くの戦乱と社会変化に直面した変革の時代であった。その中を生きる人々の思索を、私たちは古典の随筆に見ることがができる。危機に向き合い、変化を受けとめ、乗りこえる人々のことばを味わい、私たちのものの見方・考え方を見つめ直そう。

第7章 歴史を語る——物語(二)

▼目標：歴史的な事実と比較しながら、物語を解釈する

歴史物語や軍記物語は、歴史上の出来事を踏まえて書

▼目標：作者の考え方や自然観に触れる

古典の作者は、どのような時代に、どのような生活を送り、どのようなことを考えていたのだろうか。そこには時代特有の考え方もあるだろうし、現代の私たちも共感できる普遍的なものもあるだろう。自然との付き合い方、周囲の人間関係など、作者の暮らしぶりを思い浮かべながら、作者の主張を読み取ろう。

第4章 人と人が織りなす世界——物語(二)

▼目標：多様な人間関係と物語の展開を読み取る

作り物語では、多様な人間関係によってさまざまな物語世界が作られる。短編・中編・長編それぞれの特色ある物語世界の構成や展開などを的確に捉え、作品成立の背景や作品相互の関係なども踏まえながら、内容の解釈を深めよう。

第5章 体験を語る——日記

▼目標：現代に生きる古典芸能の姿と普遍性を理解する

能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎などの古典芸能は、身体動作・声・音楽といった、本来ことばでは記せないものを核とする。役者の動きと舞台のありさまは転瞬のうちに変化するが、そこから変わらぬ本質をつかみ、ことばで表現する人々の姿勢・考え方を捉え、現代に通じる価値観を理解しよう。

第8章 身体とことば——芸能

▼目標：韻文の表現の特色と歴史について理解を深める

和歌や俳諧は、散文とは異なり、短い定型の中に思いを凝縮させる韻文である。そのために、長い歴史の中でさまざまな表現の工夫が凝らされてきた。作品の成立した時代背景や作品相互の関係を踏まえながら、定型の「かたち」に込められた思いを味わい、理解を深めよう。

第9章 定型の力——和歌・歌謡・俳諧

▼目標：歴史的な事実と比較しながら、物語を解釈する

歴史物語や軍記物語は、歴史上の出来事を踏まえて書

各単元の「目標」を第一部・第二部の冒頭に提示しました。単元ごとの学びの見通しに役立ちます。

単元の目標

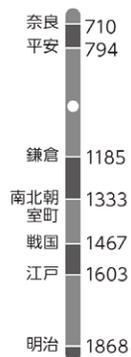
第4章

源氏物語(一)

光源氏の誕生

視点
身につけたい資質・能力について、学びの見通しを立てやすくするため、すべての教材の冒頭につけました。

紫式部



視点 登場人物の行動や心理を場面や状況に応じて的確に捉えつつ、長編物語がどう始まり、展開するかを理解しよう。

1 いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。初めよりわれはと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれるものにも思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、

- 1 いづれの御時にか どの(帝の)御代であつたらうか。
- 2 女御・更衣 「女御」は、皇后・中宮に次ぎ、「更衣」は、女御に次ぐ地位の、天皇の夫人。
- 3 めざましきもの 目にあまる者。
- 4 上達部 公卿。三位以上の者と四位の参議。
- 5 上人 殿上人。四位・五位の者の一部。および六位の蔵人で、清凉殿の殿上の間に昇ることを許された人。
- 6 あいなく 困ったことに。
- 7 人の御おぼえ 更衣に対する(帝の)ご寵愛。「人」は、更衣をさす。
- 8 楊貴妃 唐の玄宗皇帝の寵妃。玄宗は楊貴妃を寵愛するあまり、国政を顧みず、安祿山らの反乱を招いた。
- 9 いにしへの人のよしある 古い家柄の出で、教養ある人。
- 10 一の皇子 第一皇子。のちの朱雀帝。
- 11 右大臣の女御 右大臣の娘である女御。弘徽殿女御。
- 12 よせ重く 後見がしっかりして。
- 13 まうけの君 皇太子。
- 14 私物 かわいい秘蔵っ子。
- 15 上宮仕へ 天皇のそばに仕えて日常の用をつとめること。
- 16 上衆めかしけれど 高貴な人らしく見えるが。

楊貴妃のためしも引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。
父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなしたまひけれど、とりたてて、はかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ扱ひどころなく心細げなり。
前の世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、よせ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。
初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべきにはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、何事にもゆゑあることのふしぶしには、まづまう上らせたまふ、ある時には大殿籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方

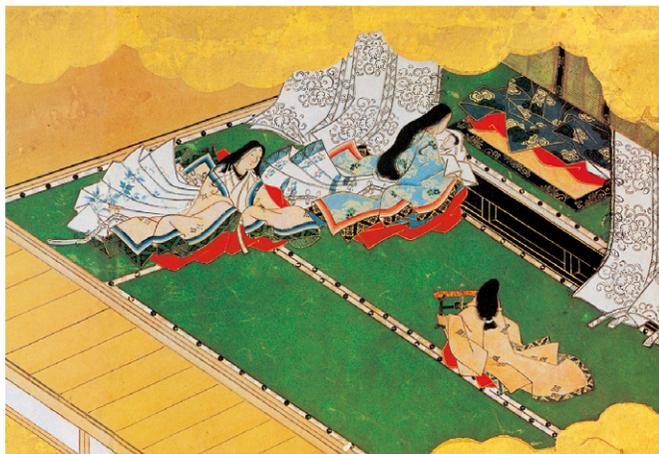
- * やむごとなし * きは
- * めざまし * あつし * あいなし
- * まばゆし * あぢきなし
- * はしたなし * かたじけなし
- * きよらなり * 心もとながる
- * にほひ * わりなし * やがて
- * あながちなり

脚注
文章を理解する上で必要な情報を掲載。

年表
作品の書かれた時代を年表で分かりやすく示しました。

重要古語
古文の重要語を本文中に*印で示し、見開きごとに整理しました。

本文の理解の助けとなるようなカラー図版を適宜挿入。



帝と皇子の対面（『源氏物語図屏風』狩野氏信筆）

にも見えしを、この皇子生まれ
たまひてのちは、いと心ことに
思ほしおきてたれば、坊¹⁷にも、
ようせずは、この皇子のゐたま
ふべきなめりと、一の皇子の女
御はおぼし疑へり。人より先に
参りたまひて、やむごとなき御
思ひなべてならず、皇女²たちな
どもおはしませば、この御方の
御いさめをのみぞ、なほわづら
はしう、心苦しう思ひきこえさ
せたまひける。

5

17 坊 東宮御所。ここでは、皇太子。

かしこき御かけをば頼みきこ
えながら、おとしめ、きずを求
めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなか
るもの思ひをぞしたまふ。

10

2 「この御方」とは誰か。

御局¹⁹は桐壺¹⁹なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙¹⁸なき御前²⁰渡りに、

15

18 かしこき御かけ 畏れ多い御庇護。
19 桐壺 後宮五舎の一つ。注25とともに、後ろ見返しを参照。「壺」は、中庭。桐が植えてあるので「桐壺」という。この局の名から、桐壺更衣と呼ばれる。
20 御前渡り 素通りすること。遠くの更衣を訪れる帝が、女御・更衣の局々の前を素通りする。

人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参²¹う上²¹りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋²²、渡殿²²のここかしこの道²³にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣²⁴の裾²⁴たへがたくまさなきこともあり、また、ある時には、え避けぬ馬道²⁴の戸²⁴を鎖²⁴しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるをいとどあはれと御覧²⁵じて、後涼殿²⁵にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司²⁶をほかに移させたまひて、上局²⁶に賜²⁶はす。その恨みましてやらむ方なし。

5

21 打橋 建物と建物との間の橋。
22 渡殿 建物と建物とをつなぐ屋根つきの廊下。
23 あやしきわざ 汚物をまき散らしたりすること。
24 馬道 建物の中を貫く板敷きの廊下。
25 後涼殿 清涼殿の西隣にある御殿。
26 上局 清涼殿の、中宮・女御などが帝に伺候するときの控えの間。後涼殿に上局を賜るのは異例の措置。

一 * おきつ

（桐壺巻）

- 理解 (1) 光源氏誕生の前と後では、桐壺更衣に対する他の女御・更衣たちの気持ちは、どのように変わっているか、まとめなさい。
- 表現 (1) 帝・弘徽殿女御・桐壺更衣・二人の皇子に対する敬語を比較しなさい。
- (2) 『竹取物語』『伊勢物語』の書き出しを調べて、『源氏物語』の書き出しと比較しなさい。

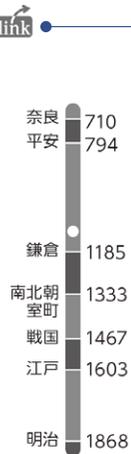
学習の手引き

「理解」「表現」の二項目に分けて、本文の理解を助けます。

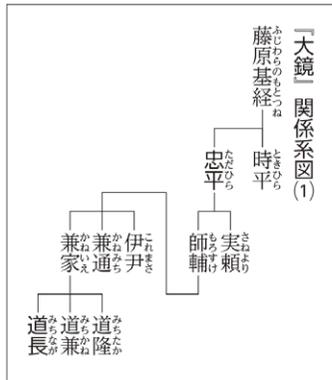
大鏡(一)

雲林院にて

先つころ、雲林院の菩提講に詣でてはべりしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嬭と行きあひて、同じ所にぬぬめり。あはれに同じやうなる者のさまかなと見はべりしに、これらうち笑ひ見かはして言ふやう、世継「年ごろ、昔の人に對面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえ合はせむ、このただ今の入道殿下の御ありさまを申し合はせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひまうしたるかな。今ぞ心やすく黄泉路もまかるべき。おほしきこと言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。かかればこそ、昔の人は、もの言はまほしくなれば、穴を掘りては言ひ入れはべりけめ、とおぼえはべり。返す返すうれしく對面したるかな。さても、幾つにかなりたまひぬる。」と言へば、今ひとりの翁、繁樹「幾つといふこと、さらに



視点 文章の構成や展開に注目するとともに、登場人物の思惑を読み取りながらエピソードの面白さを味わおう。



- 1 雲林院 現在の京都市北区紫野にあった寺。
- 2 菩提講 極楽往生を願い、「法華経」を講説する法会。雲林院では毎年五月に開かれた。こは、万寿二(二〇二五)年のそれによつたとする説が有力。
- 3 入道殿下 藤原道長、九六六一—二〇二

linkマーク

『古典探究』でもlinkマークのある教材は、インターネット上に参考資料があります。教科書「凡例」ページのQRコードもしくはURLを開くと、小社ホームページの「参考資料一覧」に遷移し、各種参考資料へのリンクが掲載されています。

古典探究



本文フォント

読みやすさに配慮したユニバーサルデザインフォントを採用しています。



雲林院の菩提講 (「大かきみ絵詞」)

おぼえはべらず。ただし、おのれは、故太政大臣貞信公の、藏人の少将と申し折の小舎人童、大犬丸ぞかし。主は、その御時の母后の宮の御方の召し使ひ、高名の太宅世継とぞ言ひはべりしかな。されば、主の御年は、おのれにはこよなくまさりたまへらむかし。みづからが小童にてありし時、主は二十五、六ばかりの男にてこそはいませしか。」と言ふれば、世継、「しかしか、さはべりしことなり。さても、主の御名はいかにぞや。」と言ふ

- 7年。「入道」は、出家した者のこと。道長は寛仁三(二〇一九)年に出家した。摂政であったので「殿下」という。
- 4 黄泉路 あの世界(死後の世界)への道。
- 5 貞信公 藤原忠平、八八〇—九四九年。「貞信公」は、諡。
- 6 藏人の少将 藏人で、近衛の少将を兼ねた者。
- 7 小舎人童 近衛の中・少将などが召し使う少年。
- 8 母后の宮 宇多天皇の母、班子女王。
- 9 きむぢ 二人称代名詞。おまえ。

*うたてげなり *やがて
*あさまし

第10章 文学の生まれる場所——伝承

古事記

倭建命

しかして、天皇また頻きて倭建命にのらしし道の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもをこと吉備の臣らが祖、名は御鉏友耳建日子をそへて尋子をたまひき。かれ、命を受けてまかりいで宮に参入りて、神の朝廷を拜みて、すなはちそしく、「天皇、すでに我を死ねと思ほすゆゑに人どもを撃ちに遣はして、返り参上り来し間、くさ人らをたまはずで、今さらに東の方十あま平らげに遣はすらむ。これによりて思はば、なすぞ。」と、うれへ泣きてまかります時に、倭臣

【参考】日本武尊の死
能褒野に至りて、痛みたまふこと甚だし。すなはち停にせる蝦夷どもをもちて、神宮に献る。よりて吉備武彦を遣はして、天皇に奏して申したまはく、「臣、命を天朝に承りて、遠く東の夷を征つ。すなはち神の恩を被り、皇の威に頼りて、叛ける者、罪に伏ひ、荒ぶる神自づからに調びぬ。ここをもちて、甲を巻き戈をさめ、懺悔して帰れり。願はくは、いづれの日いづれの時に、天朝に復命さむと。しかるに天命たちまちに至り、隙驪止めかたし。ここをもちて、独り荒野に臥し、誰に語らむこともなし。あに身の亡せむことを惜しまむや。ただし愁ふらくは、まなたりつかへまつらすなりぬることのみ。」と申したまふ。すでにして能褒野に崩ります。時に年三十なり。
天皇聞こしめして、寢席安からず、食味うまからず、晝夜にむせひて、泣き悲しび御胸打ちたまふ。
すなはち群卿たちに詔し、百寮に命せて、よりて伊勢国の能褒野の



視点 人々の間で語り継がれてきた伝承に親しむとともに、そこに込められた先人たちのもの見方や感じ方を汲み取ろう。

ヤマトタケルの死に関する伝承を、『古事記』と『日本書紀』からそれぞれ読み、表現の違いについて考える「実践」活動です。

実践：二つの伝承を読み比べて、表現の違いについて考えよう

口頭で語り伝えられてきた伝承は、書き留められることで作品内に定着する。その際、基本的なストーリーは踏まえながらも、作品成立の事情に従って、伝承に手が加えられることがある。二つの伝承の違いに注目することで、『古事記』『日本書紀』それぞれの論理を考えてみよう。

レッスン

ヤマトタケルの死にまつわる伝承を比較しよう

- 1 ヤマトタケルの死にまつわる伝承について、『古事記』(二八〇ページ)と『日本書紀』(二八五ページ)を比較して、異なる点を見つけよう。
2 ①の点に注意しながら、ヤマトタケルの死の場面から受ける印象について、『古事記』と『日本書紀』とは、どのように違うのか考えてみよう。
3 『古事記』と『日本書紀』は、それぞれヤマトタケルの死をどのように位置づけようとしているのか、話し合ってみよう。

アドバイス

最初に共通する要素を確認しておく、異なる点を

見つけやすくなる。

一方には書かれていて、一方には書かれていない場面がある、ということだけでなく、その場面が書かれなかった代わりに詳しく表現されていることがある、注目してみよう。

説明する際には、『古事記』と『日本書紀』の相違点が的確に伝わるような表現を選ぼう。

発展

ヤマトタケルの死にまつわる伝承以外にも、『古事記』と『日本書紀』とで位置づけ方の異なる場面はないか、探してみよう。そのうえで、『古事記』と『日本書紀』の作品としての違いについて考え、レポートにまとめてみよう。

古典探究・漢文編

目次

● 漢文教材は、第一部7単元
散文20教材、漢詩12首。
● スタンダードな教材をバランスよく配列。

目次 古探716
A5判 192ページ

漢文編……第一部

単元の目標……………10

第1章 創成と典故——故事成語

- 新 知音……………12
〔呂氏春秋〕
- 曳尾於塗中……………14
〔莊子〕
- 先從「隗始」……………16
〔戰國策〕

第2章 生き方の表明——文章（一）

- 漁父辞……………18
屈原〔楚辭〕
- 桃花源記……………21
陶淵明〔陶淵明集〕
- 春夜宴「桃李園」序……………25
李白〔古文真寶・後集〕



第3章 韻文の表現——近体詩

- 新 独坐「敬亭山」……………28
李白
- 新 登「樂遊原」……………28
李商隱
- 新 九月九日憶「山東兄弟」……………29
王維
- 新 芙蓉樓送「辛漸」……………29
王昌齡
- 楓橋夜泊……………29
張繼
- 野望……………30
王績
- 旅夜書懷……………30
杜甫
- 八月十五夜、禁中独直、
对「月憶」元九……………31
白居易
- 新 遊「山西村」……………32
陸游
- 聞「旅雁」……………34
菅原道真
- 即事……………34
新井白石
- 無題……………35
夏目漱石

第4章 言動の記録——史伝

- 天道是邪、非邪 司馬遷……………36
〔史記（一）伯夷列伝〕
- 鴻門之会……………38
〔史記（一）項羽本紀〕
- 四面楚歌……………47
〔史記（一）項羽本紀〕
- 新 稲葉一徹……………51
大槻磐溪〔近古史談〕
- 〔コラム〕中国の史書……………53

第6章 説得の技法——文章（二）

- 師説……………62
韓愈〔唐宋八家文読本〕
- 捕蛇者説……………66
柳宗元〔唐宋八家文読本〕
- 愛蓮説……………70
周敦頤〔古文真寶・後集〕

第7章 読み継がれる思想——儒家

- 論語 それぞれの生き方……………72
〔論語〕
- 新 人無「有」不「善」……………76
〔孟子〕
- 四端……………78
〔孟子〕
- 性悪……………81
〔荀子〕
- 〔コラム〕性善説と性悪説……………83
- 読書案内……………84



比べ読みに最適な
【参考】教材。

- 第5章 物語の創造——小説
- 鶴之報恩……………54
干宝〔搜神記〕
- 売鬼……………54
干宝〔搜神記〕
- 新 王昭君……………57
〔西京雜記〕
- 〔参考〕王昭君（李白）・王昭君（大江朝綱）
王昭君をよめる（赤染衛門）……………59
- 実践 同じテーマの作品を比較し、それぞれの特徴を理解しよう……………60

漢文学習に必要な知識。

古典探究・漢文編

目次

● 第二部 7 単元 散文 24 教材・漢詩 8 首。

漢文編……第二部

単元の目標……………86

第1章 評価する視点——故事成語

- 新 断腸 〈世説新語〉……………88
- 螳螂之斧 〈莊子・淮南子〉……………89
- 愚公移山 〈列子〉……………91



第3章 韻文の伝統——古体詩

- 秋天 漢・武帝……………107
- 秋風辞 〈樂府詩集〉……………108
- 飲酒 其五 陶淵明……………108
- 送別 王維……………109
- 漁翁 柳宗元……………109
- 石壕吏 杜甫……………110
- 長恨歌 白居易……………113
- 〈コラム〉漢詩のきまり……………119

第2章 主張と文体——文章(一)

- 詩経大序 〈詩経〉……………94
- 〔参考〕古今和歌集真名序(紀淑望)……………96
- 実践 文学論を比較し、共通点や相違点を論述しよう……………97
- 論文 曹丕〈文選〉……………98
- 五柳先生伝 陶淵明〈陶淵明集〉……………100
- 新 前赤壁賦 蘇軾〈古文真宝・後集〉……………102

漢文を身近なものとするアクティブ・ラーニング例としての「実践」。

第4章 言動の真意——史伝

- 新 怒髮上衝冠 司馬遷〈史記(二)廉頗藺相如列伝〉……………120
- 刎頸之交 〈史記(二)廉頗藺相如列伝〉……………127
- 〔参考〕廉頗藺相如列伝論贊……………129
- 国士無双 〈史記(二)淮陰侯列伝〉……………130
- 信玄何在 頼山陽〈日本外史〉……………136
- 〈コラム〉日本人の漢文……………139

第7章 思想の展開——諸子

- 無之用 〈老子〉……………160
- 新 柔之勝剛 〈老子〉……………160
- 渾沌 〈莊子〉……………162
- 新 無用之用 〈莊子〉……………163
- 守業 〈韓非子〉……………164
- 嬰「逆鱗」 〈韓非子〉……………165
- 兼愛 〈墨子〉……………166
- 新 〔参考〕足責〈墨子〉……………167
- 新 言と黙 興膳 宏……………168
- 〈コラム〉諸子百家……………176



入試頻出文章教材。

- 第6章 心情の表出——文章(二)
- 前出師表 諸葛亮〈古文真宝・後集〉……………148
- 与「微之」書 白居易〈白氏文集〉……………151
- 傷仲永 王安石〈臨川先生文集〉……………157

古典を扱った近代以降の文章。

- 送り仮名のきまり……………178
- 漢語の理解……………180
- 中国文化史……………182
- 主な漢文句法……………186

単元の目標

この教科書は、それぞれの章に次のような学習目標があります。学習目標に注意して、見通しを持って学びましょう。

第1章 創成と典故——故事成語

▼目標：新たな表現を支える典故の力を理解する

ことばが意思伝達の役割を持つ以上、認識を他者と共有できる情報を持たない限り、伝達機能は働かない。古典は、時代を超えて今に生きる共有情報である。典故（典故となる故事）をもとに生成されたことばの真意を理解しよう。

第2章 生き方の表明——文章（一）

▼目標：言語表現に託された生き方の表明を読み取る

ことばは、自己の意思を確認する役割も果たしている。自らの思いを表明しながら、同時に確認して心に刻んでいるのだ。古典作品に示される人生観は、時代の制約を超えた普遍性を持つがゆえに、長く読み継がれてきた。作者がことばに託して表現した生き方を、今後の自分が歩むべき道と比較しながら、しっかりと読み取ろう。

第3章 韻文の表現——近体詩

▼目標：景情一致の技法を理解する

自分の心情を的確に表現するための技法の一つに「景情一致」がある。目に映る景色に自身の感情や思いを託すことで、他者と心情を共有する技法である。無駄のない、音律の整ったことばで表現されている近体詩の名品を読解することにより、他者の心情を理解し、想像する力を磨こう。

第4章 言動の記録——史伝

▼目標：言動の記録をたどり、人物像を捉える

史伝は、人の行動やことばを記録し、後世に伝え続けてきた。これらの文章は、単なる歴史的事実の記録という枠から離れ、時空を超えて読む者の脳裏に人物像を生か生きと形作る。発言や行動を通して人物の心情を理解する力を養おう。

第5章 物語の創造——小説

▼目標：作品を正確に読み取り、その構成を分析し、表現効果を理解する

小説はことばで物語の世界を構築し、読み手の興味をかき立てながらクライマックスへと導く。この章では、比較的短い小説を読んで構成の工夫を理解しよう。また、その表現効果を確認し、同じ素材を用いた詩歌などと比較しながら、それらの構成を分析しよう。併せてストーリーを組み立て、自ら言葉を紡いで、創作活動してみよう。

第6章 説得の技法——文章（二）

▼目標：典故や比喩に託された主張を読み取る

説得力を高める表現技巧の一つに、典故の使用や比喩がある。これは、故事を引用したり一見無関係な他の事物に仮託したりして、自分の主張の核心を相手に実感させる表現方法である。この章では、典故や比喩の表現技法を駆使した文種である「説」の読解を通し、表現者の意図を正確に把握する力を高めよう。

第7章 読み継がれる思想——儒家

▼目標：普遍的な人間性を語る論法に触れ、自らの考えを広げる

東アジア漢字文化圏の文化・政治に多大な影響を与えてきた儒家の思想は、他者との共生の重要性を主張してきた。社会の持続的な発展を考える時に儒家的な思考方法が、強力な柱石として機能し続けてきた。孔子という存在を出発点に、それぞれの展開を見せた儒家の言説を讀み解き、読み継がれてきたことばの特徴に注目し、豊かな言語生活の基盤を形成しよう。



孔子

各単元の「目標」を第一部・第二部の冒頭に提示しました。単元ごとの学びの見通しに役立ちます。

単元の目標

●おすすめの教材(漢文編①)

『史記』は、主要な場面を中心に収録。リード文や小見出し、豊富な図版によって、読解を助けることができます。

鴻門之会

前後の流れが分かるリード文を適宜挿入。

秦の始皇帝嬴政は、乱世を平定し天下を統一したが、始皇帝没後、各地で反乱が起こった。特に楚の項羽(項王)と漢の劉邦(沛公)の二人が勢力を持ち、秦の都・咸陽陥落を目ざして先陣を争った。



項羽、大いに怒る

楚軍行略定秦地、至函谷関、有兵守関、不得入。又聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使當陽君等擊関。項羽遂入、至于戲西。沛公軍霸上、未得与項羽相見。沛公左司

旧字体

常用漢字体と旧字体(正字)の字面が異なる場合は、初出に旧字体を示しました。

馬曹無傷使人言於項羽曰沛公欲王関中、使子嬰為相、珍寶尽有之。項羽大怒曰旦日饗士卒、為擊破沛公軍。當是時項羽兵四十萬、在新豐鴻門。沛公兵十萬、在霸上。范增說項羽曰沛公居山東時、貪於財貨、好美姬。今入関、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣、皆為龍虎、成五采。此天子氣也。急擊、勿失。

かつて張良に命を助けられたことがあった項羽(項王)の叔父・項伯の知らせにより、劉邦(沛公)は自分が厳しい状況に追い込まれたのを知った。項伯のはからいで劉邦は、項羽のもとに釈明に向かった。

- 1 略定 攻略し、平定する。
- 2 函谷関 戦国時代に秦が現在の河南省靈宝市の東北に置いた関所。
- 3 沛公 劉邦。後の漢の高祖。字は季。前二四七―前一九五年。沛(現在の江蘇省徐州市沛県)の人。沛で蜂起した。
- 4 咸陽 現在の陝西省咸陽市にあった秦の都。
- 5 項羽 項王。前二三二―前二〇二年。姓は項、名は籍。羽は字。下相(現在の江蘇省宿遷市)の人。項羽の家系は、代々楚の部将であった。

年表

作品の書かれた時代を年表で分かりやすく示しました。

- 10 曹無傷 劉邦の配下の武将。伝未詳。
- 11 関中 函谷関より西、現在の陝西省一帯の地域。四方を関所に囲まれていたことよる呼び名。秦の根拠地。
- 12 子嬰 ?―前二〇六年。始皇帝の孫。
- 13 旦日 翌朝。
- 14 饗 酒食を供してねぎらう。
- 15 新豐鴻門 現在の陝西省西安市臨潼区の東の地名。
- 16 范增 七十歳で項羽に仕えた老参謀。
- 17 山東 ここは、函谷関より東の地。
- 18 幸 寵愛する。
- 19 望其氣 人から立ちのぼる気を見る。
- 20 龍虎「龍・虎」ともに、天子の象徴。
- 21 成五采 「五采」は、青・赤・黄・白・黒、の五色。天子の瑞祥。

22 失 取り逃がす。

2 范増が「急擊、勿失。」と進言したのはなぜか。

- * 使_シA_ヲB_セ (使役)
- * 未_レA_シ (再読文字・否定)
- * 令_レA_ヲB_セ (使役)
- * 勿_レシ_ス (禁止)

句法のまとめ

重要な句法を本文中に*印で示し、教材ごとに整理。

項伯、劍を抜き起ちて舞う

沛公旦日從^二百余騎、來見^ト項王、至^レ鴻門、謝^{シテ}曰、臣^ハ与^ニ將軍^一戮^レ力^ヲ而攻^レ秦^ヲ。將軍^ハ戰^ニ河北^ニ、臣^ハ戰^ニ河南^ニ。然^レ不^レ自^ラ意^ヲ能^ク先^ニ入^{リテ}関^ヲ破^リ秦^ヲ、得^テ復^シ見^ユ將軍^ニ於^レ此^ニ。今^マ者^ハ有^リ小^人之^言、令^ム將軍^ヲ与^ニ臣^一有^レ郤^{（げき）}。項王曰、此沛公左司馬曹無傷言之、不^レ然^ラ、籍^ハ何^ヲ以^テ至此^ニ。」

項王即日、因留^ニ沛公^ヲ与^ニ飲^ス。項王、項伯、東嚮^シ坐^ス。項伯、南嚮^シ坐^ス。項王、項伯、東嚮^シ坐^ス。張良、西嚮^シ坐^ス。范增、數目^シ項王、拳^ニ所佩^ル玉玦^ヲ、以^テ示^ス之^ニ。者^ハ三^ニ。項王默^シ然^ト不^レ応^ズ。

10

* 不^レ然^ラト
何^ヲ以^テ至此^ニ (反語)



玉玦 (西周)

24 項伯 ? 前一九二年、項羽の叔父。殺人の罪で逃亡中、張良に助けられた。

25 東嚮 東に向かう。「嚮」は「向」と同じ。当時、東に面するのは上座。

26 垂父 父に次いで尊敬する人。

27 張良 政治家。劉邦の功臣。? 前一八九年、韓の政治家。始皇帝暗殺に失敗した後、劉邦に仕えた。項伯の命の恩人。

28 玉玦 帯につける飾り玉器。環の一部に切れ目がある。「玦」の音が、決行・決心の意を示している。

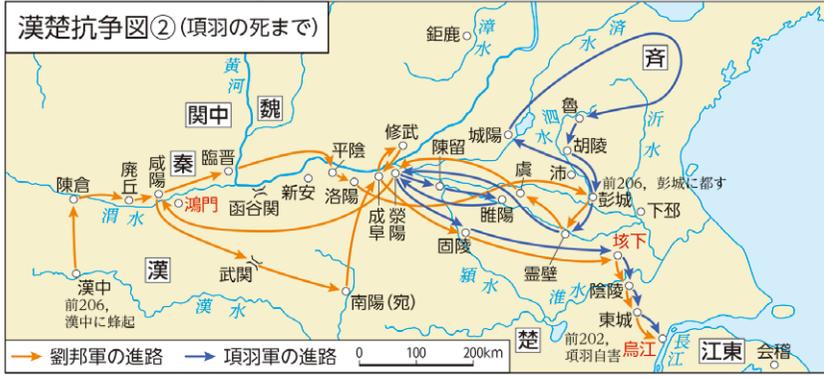
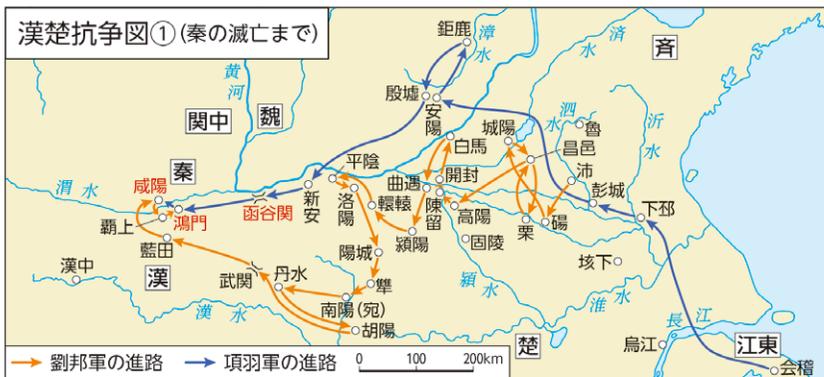
23 郤 すきま。みぞ。「隙」と同じ。

脚問
文脈を理解する上でポイントとなる部分は簡潔な脚問を通して確認。

図版
本文の理解を助ける図版を豊富に掲載しました。



鴻門会 (安田靉彦筆)



第5章

王昭君

元帝後宮既多、不得常見、乃使画工图形、案图召幸之。诸宫人皆赂画工、多者十万、少者亦不减五万。独王嫱不肯、遂不得见。匈奴入朝、求美入



王昭君图(菱田春草筆)

出典

春秋 BC770
戦国 BC403
秦漢 BC221 BC206
後漢 25
三國 220 280
南北朝 420 589
隋唐 589 618

- 1 元帝 前漢第十代の皇帝。在位前91〜前33。
2 幸 寵愛する、の意。
3 賂 賄賂を贈る。
4 王嫱 王昭君のこと。嫱は名、昭君は字。生没年未詳。嫁ぎ先で死んだ。
5 肯 よしとする。
6 匈奴 中国北方を根拠地とした遊牧騎馬民族。紀元前3年、匈奴の王、呼韓邪単于が入朝した。
7 閼氏 匈奴の王の正妻。
8 上天子 元帝のこと。
9 名簿 名簿。
10 罪状 罪状を調べ上げる。
11 棄市 人目につく市中で行われる死刑。
* 不復 不復(復分否定)

是上案图、以昭君行及去、召見貌。一善应对、举止闲雅、帝悔之、而名重信、於外国故不復更人、乃弃案市。

〔西京雜記〕

- 7 閼氏 匈奴の王の正妻。
8 上天子 元帝のこと。
9 名簿 名簿。
10 罪状 罪状を調べ上げる。
11 棄市 人目につく市中で行われる死刑。
* 不復 不復(復分否定)

まずは「西京雜記」から「王昭君」の物語を読む。図版は菱田春草。

- 理解 (1) 諸宮人と王昭君について、それぞれの行動の違いに注意して、人物像を話し合いなさい。
(2) 举止闲雅(五八、三)とあるが、誰の、どのようなよさを描いているか、まごめなさい。
●義理 (1) 不得常見(五七、二)・不復更人(五八、三)を、部分否定の用法に注意しながら現代語に訳しなさい。
西京雜記 晋代に成立か、六卷。前漢の都・長安(現在の陝西省西安市)をめぐる逸話や、漢の宮廷の風俗などを記録した書。編著者未詳。前漢の劉向(經学者?一三三年)の著したものを晋の鄭洪(思想家、二八三―三四三年)が集録して編んだとする説もあるが不明。本書からは、梁の殷芸(文人、四七一―五二九年)の「小説」(十卷)に多く引用されている。

王昭君

昭君 上馬啼紅頰
今日漢宮人 明朝胡地妾

李白 李白全集

王昭君

翠黛紅顏錦繡粧
泣尋沙塞出家鄉
邊風吹斷秋心緒
隴水流添夜淚行
胡角一聲霜後夢
漢宮万里月前腸
昭君若贈黃金賂
定是終身奉帝王

赤染衛門(後拾遺和歌集)

なげきこし道の露にもまさりけれなれにし里を恋ふる涙は

- 1 玉鞍 鞍の美称。
2 胡地 北方の民族。こは、匈奴のいる地。
3 翠黛 みどり色のまゆげ。美人のまゆ。美人のたとえ。
4 錦繡 にしと刺繍した織物で、美しい着飾。
5 沙塞 沙漠にある砦。
6 邊風 辺境に吹く風。
7 心緒 心持。
8 隴水 甘粛省を流れる川。
9 漢行 流れる涙のたとえ。
10 胡角 胡は、北方の異民族。こは、匈奴の歌へる角笛。
11 定 きっと。
12 なげきこし道 涙きながら匈奴の地まで来た、その道中。
大江朝綱 八八―九五七年。平安時代中期の学者。
赤染衛門 生没年未詳。平安時代中期の女性歌人。

李白、大江朝綱の漢詩、赤染衛門の和歌。

12~13世紀に描かれた「明妃出塞図」。



〔明妃出塞図〕(12~13世紀 宮藤嘉隆)

「王昭君」をテーマに描かれた絵画を分析してみよう

- ① 上の絵画は、王昭君の物語を題材として描かれている。「西京雜記」を手掛かりに、どのようなことが描かれているか、話し合ってみよう。
② 菱田春草の「王昭君図」(五七ページ)や安田毅彦の「王昭君」(九ページ)と比べて、どのような点が変わっているか、話し合ってみよう。
③ それぞれの絵画が「王昭君」のどの場面を描いているのか、考えよう。
④ 画家は「王昭君」をどのように解釈して描いたのか、考えよう。

・「王昭君」をテーマに、小説・詩歌・シナリオ・絵画など、自分なりの表現方法で創作活動してみよう。
・「王昭君」の他に、文学や芸術の題材となっている漢文学作品がないか探し、レポートにまとめてみよう。

実践：同じテーマの作品を比較し、それぞれの特徴を理解しよう

古典は人から人へと伝えられ、現在の私たちに受け渡されている。その過程で人々は、古典に材を取った作品をそれぞれの手法で生み出してきた。古典は創作のための一つの契機となるのである。人がいかに古典を受容し、そして自身の作品創作に活かしてきたのか、考えよう。

「王昭君」を詠じた詩歌を比較しよう

- ① 内容(西京雜記)と共通している点、用いられていることが異なっている点がある。それによって、どのような効果が生まれているか、考えよう。
② 西京雜記にはなかった内容やことはがないかどうかが、探してみよう。また、そのようなことは内容が付け加えられている理由は何か、考えよう。
③ 各作品で、どのような点が生かされているか、また、そこに工夫があると感じた理由について説明しよう。それぞれの作者が表現したかったことはどのようなことか、考えよう。

王昭君を詠じた詩歌について、他の人の意見も参考にしてまとめ、発表しよう。

教科書収録教材の筆者の大学入試出題状況(一部)

2019 | 2023
年度

*青字は教科書本文と同一箇所、緑字は、教科書本文と同一出典。

●【論理国語】収録教材の筆者の大学入試出典一覧(一部)

内田 樹	『修業論』—北海学園大 『サル化する世界』—青山学院大
河野哲也	『境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ』—センター試験
若林幹夫	『社会(学)を読む』—学習院大
橋爪大三郎	『正しい本の読み方』—白百合女子大
岸 政彦	『はじめての沖縄』—熊本大
夏目漱石	虚子著『鶏頭』序—上智大 『子規の画』—東京大 『三四郎』—三重大
若桑みどり	『イメージの歴史』—関西大
湯川秀樹	『旅人 ある物理学者の回想』—福岡大
今福龍太	『宮沢賢治 デクノボーの叡知』—早稲田大・九州大
湯浅 誠	『反貧困』—千葉大
佐藤俊樹	『近代・組織・資本主義』—大阪大
船木 亨	『現代思想講義』—青山学院大 『蓋然性と言語』—早稲田大 『死の病いと生の哲学』—東北学院大
杉田 敦	『境界線の政治学』—東北大

『』は書名、〔〕は文章タイトル

●【文学国語】収録教材の筆者の大学入試出典一覧(一部)

原 研哉	『日本のデザイン』—美意識が作る未来—福岡教育大
今福龍太	『宮沢賢治 デクノボーの叡知』—早稲田大・九州大
中島 敦	『狐憑』—福井県立大 『文字禍』—防衛医科大学
高階秀爾	『日本人にとって美しさとは何か』—三重県立看護大
坂口安吾	『日本文化私観』—南山大
藤原辰史	『食べること考えること』—亜細亜大・津田塾大 『分解の哲学』—学習院大・名城大 『分解の哲学』—中央大
夏目漱石	『虚子著『鶏頭』序』—上智大 『子規の絵』—東京大 『三四郎』—三重大
小川洋子	『ことり』—東北大・聖心女子大
ドミニク・チエン	『未来を思い出すために』—山梨大 『遠隔でも共に在る』感覚 入力見えるチャット、関係豊かに—白百合女子大
寺田寅彦	『化物の進化』—成城大 『蓄音機』—成蹊大 『案内者』—立教大
加藤周一	『明治初期の文体』—早稲田大 『日本文学史序説』—上智大 『科学の方法と文学の擁護』—九州大

『』は書名、〔〕は文章タイトル

丸山眞男	『陸羯南—人と思想』—早稲田大
野家啓一	『物語の哲学』—大阪経済大 『ホモ・ナランスの可能性』—大阪大
岩井克人	『二十一世紀の資本主義論』—慶応義塾大
森本あんり	『異端の時代』—立命館大
蓮實重彦	『反日本語論』—東北学院大
前田英樹	『愛読の方法』—成城大・甲南大
坂口安吾	『日本文化私観』—南山大
福沢諭吉	『古書画流行』—一橋大 『学問のすすめ』—早稲田大
仲正昌樹	『フライバシーの哲学』—東京経済大 『自由と自律』—大阪市立大 『現代哲学の論点』—早稲田大
木村 敏	『時間と自己』—神戸学院大 『自分ということ』—成蹊大
佐伯啓思	『脱戦後のすすめ』—同志社女子大 『経済成長主義への訣別』—静岡大
中井久夫	『笑いの生物学を試みる』—南山大

多和田葉子	『雪の練習生』—神戸親和女子大 『Hirukoは語る』—琉球大 『ゴットハルト鉄道』—大阪大
三島由紀夫	『西洋の庭園と日本の庭園』—『仙洞御所』序文—明治学院大
森 鷗外	『半日』—宮崎大
榎木野衣	『美術 祝祭、狂乱、共闘、流転』—東海大 『感性は感動しない—美術の見方、批評の作法』—神戸学院大
谷崎潤一郎	『陰翳礼讃』—関東学院大
藤田省三	『精神的考察』—早稲田大
太宰 治	『葉桜と魔笛』—宮崎大 『畜犬談』—香川大
津村記久子	『サキの忘れ物』—共通テスト
小林秀雄	『骨董』—専修大
魯迅	『孤独者』—熊本大
村上春樹	『壁と卵』—琉球大
渡辺一夫	『ある神学者の話』—大分大

指導資料一覧

評価問題・教科書紙面 PDF・実践用ワークシート・

図解穴埋めワークシート・ループリック評価シートなど、さらに充実しました。

指導資料各種の内容		現代の国語 (現国712) 本体20,000円	言語文化 (言文712) 本体26,000円
指導書『学習指導の研究』(A5判)		4分冊	5分冊
指導資料データ (CDROM)	教科書本文データ	一太郎・Word	一太郎・Word
	訓点付き漢文原文データ	—	一太郎・Word・PDF
	古文品詞分解	—	一太郎・Word
	漢文書き下し文	—	一太郎・Word
	古文・漢文現代語訳	—	一太郎・Word
	〈テスト・評価問題〉基本問題	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
	〈テスト・評価問題〉標準問題	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
	〈テスト・評価問題〉発展問題	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
	〈テスト・プリント〉小テスト問題	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
	漢文編集システム	—	一太郎・Word
オンライン指導資料	教科書紙面PDF	PDF	PDF
	課題ノートデータ	一太郎・Word	一太郎・Word
	授業用プリント	一太郎・Word	一太郎・Word
	実践用ワークシート	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
	図解穴埋めワークシート	PDF	—
	授業用図版素材	PDF	PDF
	ループリック評価シート	Excel	Excel
	学習link集	デジタル・コンテンツ	デジタル・コンテンツ
朗読CD	—	※別売 本体6,000円(2枚組)	
指導書分冊『学習指導の研究』PDFファイル版	※別売 本体5,000円	※別売 本体6,000円	

論理国語 (論国710) 本体34,000円	文学国語 (文国708) 本体34,000円	古典探究 (古探715 / 716) 本体36,000円
5分冊	5分冊	6分冊
一太郎・Word	一太郎・Word	一太郎・Word
—	—	一太郎・Word・PDF
—	—	一太郎・Word
—	—	一太郎・Word
一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
—	—	一太郎・Word
PDF	PDF	PDF
一太郎・Word	一太郎・Word	一太郎・Word
一太郎・Word	一太郎・Word	一太郎・Word
一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF	一太郎・Word・PDF
PDF	—	—
PDF	PDF	PDF
Excel	Excel	Excel
デジタル・コンテンツ	デジタル・コンテンツ	デジタル・コンテンツ
—	※別売 本体8,000円(3枚組)	※別売 本体6,000円(2枚組)
※別売 本体6,000円	※別売 本体6,000円	※別売 本体6,000円

指導書『学習指導の研究』の内容 | 全体を次の項目で構成しています。

- 単元の解説

単元のねらい・教材編集の意図・この単元で身につく能力・資質
- 教材のねらい

教材ごとに見開きで指導のポイントを解説
- 学習指導の展開例

教材の指導計画(配当時間)・指導目標・学習活動・指導上の留意点
- 出典
- 著者(作者)解説
- 要旨(主題)

100字・200字の二種
- 意味段落の要旨

教材の全体を意味段落による表で示し、各段落の内容を要約
- 全体の構成図

教材本文の流れをチャート形式で図解(※現代文教材のみ)
- 叙述と注解

教材本文の語句の解説や、文脈上での叙述の解釈
- 学習のポイント

授業前のトピックの紹介や、各段落の要点を整理 (※現代文教材のみ)
- 発問例/脚問の解答

教科書収録の脚問と、発問例・解答。各問には難易度を表示
- 板書例

授業の要所要所で示す板書例
- キーワード

本文理解に重要なキーワードを解説 (※現代文教材のみ)
- 作品解説(鑑賞)
- 参考資料
- 参考文献
- 手引きの解答例・指導上の留意点
- オンライン指導資料

古文・漢文教材には、このほかに以下の項目があります。

 - 品詞分解 ※古文編
 - 総ルビ付き本文 ※古文編
 - 総ルビ付き訓読(書き下し文) ※漢文編
 - 現代語訳 ※古文編・漢文編

漢文編集システム | 漢文の問題作成も手軽にできます。

①パソコンに新たなソフトをインストールする必要なし。
 (Microsoft Word® を利用した全く新しい編集システム)

②返り点や送り仮名などの訓点・傍線・記号などの入力・加工が簡単にできます。

③編集システムを利用してオリジナル訓点付き本文も作成できます。

動作環境/対応 OS : Windows 10,11 / 対応ソフト : Microsoft Word 2003 以降

オンライン指導資料 | 指導書『学習指導の研究』を通して、下記のオンライン指導資料が利用できます。

実践用ワークシート

図解穴埋めワークシート

ループリック評価シート

授業をサポートする周辺教材のご案内

朗読CD 指導資料

『言語文化』
朗読CD 2枚組
本体6,000円+税
/ ISBN 978-4-480-90583-3

『文学国語』
朗読CD 3枚組
本体8,000円+税
/ ISBN 978-4-480-90598-7

『古典探究
(古文編・漢文編)』
朗読CD 2枚組
本体6,000円+税
/ ISBN 978-4-480-90599-4

準拠課題ノート一覧 学校専売品

現国712
現代の国語 課題ノート
B5判/別冊解答付/
書き込み式/96頁/
本体500円+税
ISBN 978-4-480-91055-4

言文712
言語文化 課題ノート
B5判/別冊解答付/
書き込み式/128頁/
本体550円+税
ISBN 978-4-480-91054-7

論国710
論理国語 課題ノート
B5判/別冊解答付/書き込み式/160頁
本体770円+税 ISBN 978-4-480-91056-1

文国708
文学国語 課題ノート
B5判/別冊解答付/書き込み式/144頁
本体770円+税 ISBN 978-4-480-91057-8

古探715・716
古典探究 課題ノート
[古文編・漢文編]
B5判/別冊解答付/書き込み式/240頁
本体840円+税 ISBN 978-4-480-91058-5

補助教材集

ちくま文学講読〈初級編〉 監修 東京大学 安藤 宏
日本大学 紅野謙介

A5判/128頁/本体560円+税/ISBN 978-4-480-91091-2

文学の世界を広げる準教科書。1年生でもっと文学的文章を生徒に触れさせたい先生方に!

指導資料も完備(別売) 学校専売品

指導用資料(冊子) 評価問題・本文データ(CD-ROM)付

A5判/368頁/本体7,000円+税/ISBN 978-4-480-90584-0

ちくま文学講読〈上級編〉 監修 東京大学 安藤 宏
日本大学 紅野謙介

A5判/256頁/本体900円+税/ISBN 978-4-480-91740-9

文学の世界を深める準教科書。2・3年生で必須の文学的文章を扱いたい先生方に!

指導資料も完備(別売) 学校専売品

指導用資料(冊子) 評価問題・本文データ(CD-ROM)付

A5判/792頁/本体9,000円+税/ISBN 978-4-480-91744-7



デジタル教科書 指導資料

学校専売品



現代の国語 指導者用デジタル教科書(DVD-ROM版)
本体50,000円+税/ISBN 978-4-480-90581-9

現代の国語 指導者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 10 ID
本体52,000円+税/ISBN 978-4-480-90582-6

現代の国語
学習者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 1 ID
本体1,500円+税/
ISBN 978-4-480-91097-4



言語文化 指導者用デジタル教科書(DVD-ROM版)
本体60,000円+税/ISBN 978-4-480-90580-2

言語文化 指導者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 10 ID
本体62,000円+税/ISBN 978-4-480-90579-6

言語文化
学習者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 1 ID
本体1,800円+税/
ISBN 978-4-480-91099-8



論理国語 指導者用デジタル教科書(DVD-ROM版)
本体32,000円+税/ISBN 978-4-480-90594-9

論理国語 指導者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 10 ID
本体34,000円+税/ISBN 978-4-480-90591-8

論理国語
学習者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 1 ID
本体1,500円+税/
ISBN 978-4-480-91100-1



文学国語 指導者用デジタル教科書(DVD-ROM版)
本体36,000円+税/ISBN 978-4-480-90595-6

文学国語 指導者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 10 ID
本体38,000円+税/ISBN 978-4-480-90592-5

文学国語
学習者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 1 ID
本体1,500円+税/
ISBN 978-4-480-91101-8



古典探究 [古文編・漢文編]
指導者用デジタル教科書(DVD-ROM版)
本体36,000円+税/ISBN 978-4-480-90597-0

古典探究 [古文編・漢文編]
指導者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 10 ID
本体38,000円+税/ISBN 978-4-480-90593-2

古典探究 [古文編・漢文編]
学習者用デジタル教科書(クラウド版)
*1ライセンスあたり 1 ID
本体1,700円+税/
ISBN 978-4-480-91102-5

デジタル教科書関連書 次の副読本は、筑摩書房版デジタル教科書に関連づけられています。



詳説 古典文法 改訂版

井島正博 著 伊藤博美・仲島ひとみ 著

*指導資料・補充問題データCD-ROM

A5判/別冊解答付/176頁/

本体680円+税/ISBN 978-4-480-91737-9

学校専売品

詳説 古典文法 改訂版

準拠 学習ノート

『詳説古典文法 改訂版』編集委員会 編著

B5判/別冊解答付/64頁/

本体500円+税/ISBN 978-4-480-91092-9

学校専売品



10のグループで覚える
読解 古文単語343

村田正純・吉田光 著

*自動問題作成システム(Web版)

B6変型判/256頁/

本体900円+税/
ISBN 978-4-480-91735-5



詳説 漢文句法 改訂版

三上英司 編著 石村貴博・大橋賢一・泊 功 著

*評価問題データCD-ROM

A5判/別冊解答付/224頁/

本体700円+税/ISBN 978-4-480-91738-6

学校専売品

詳説 漢文句法 改訂版

準拠 学習ノート

北島大悟 編著

B5判/別冊解答付/48頁/

本体500円+税/ISBN 978-4-480-91093-6

学校専売品

教科書名	教科書調査の観点（発行者 143 筑摩）								
	(1) 内容			(2) 構成・分量	(3) 表記・表現および使用上の便宜	(4) その他			
	① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力	③ 言語活動						
論理国語 (論国710)	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項について理解を深めたり、自らの考えを広げたりする評論教材や学習の手引きが充実している。	B 書くこと 論理的な文章や実用的な文章を書くことの資質・能力に資する教材が充実しており、十分配慮されている。	「実践」や教材ごとの手引きで主体的対話的で深い学びを実践する数多くの言語活動例が示され、十分配慮されている。	・教材収録本数が多く、分野も多岐にわたり、教材選択の幅が広い。	・脚注や地図・図版などが適宜掲げられており学習の便宜が図られている。	・意欲的に発掘された新教材が多く掲載されていて清新な印象を受けた。			
	(2) 情報の扱い方について理解を深め、自ら情報を利用して思考を深めるための評論教材や言語活動が充実している。	C 読むこと 論理的な文章や実用的な文章について、根本から問い直し、多様な視点を持ち、視野を広げ、論理的思考を育む教材が充実している。					・単元ごとに「単元の目標」が示され、単元を通しての学習の見通しが立つように工夫されている。	・手引きや脚問によって理解を深められるよう配慮されている。	・評論読解に役立つコラムがよく整理されている。
	(3) 新たな考えの構築に資する読書について、教材ごとに著者の主な作品が紹介されており、十分配慮されている。						・教材ごとに「視点」が示されて、教材を通して学習の見通しが立つように工夫されている。		
文学国語 (文国708)	(1) 言葉の特徴や働きについて理解を深める近代以降の文学的文章と、学習の手引きが充実している。	B 書くこと 文学的文章を書くことの資質・能力に資する教材が充実しており、十分配慮されている。	「実践」や教材ごとの手引きで主体的対話的で深い学びを実践する数多くの言語活動例が示され、十分配慮されている。	・教材収録本数が多く、作品や作者のバリエーションも多岐にわたり、教材選択の幅が広い。	・脚注や地図・図版などが適宜掲げられており学習の便宜が図られている。	・意欲的に発掘された新教材が多く掲載されていて清新な印象を受けた。			
	(2) 我が国の言語活動に関する知識・技能が身につく文学的文章と、言語活動が充実している。	C 読むこと 文学的文章について、作品をふまえて考察を深めるための教材が充実している。					・単元ごとに「単元の目標」が示され、単元を通しての学習の見通しが立つように工夫されている。	・手引きや脚問によって理解を深められるよう配慮されている。	・意欲的に発掘された新教材が多く掲載されていて清新な印象を受けた。
	(3) 人間、社会、自然などの対するものの方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。						・教材ごとに「視点」が示されて、教材を通して学習の見通しが立つように工夫されている。		・教材の理解に役立つコラムがよく整理されている。
古典探究 (古探 715/716)	(1) 古典の作品における言葉の特徴や用いられ方について理解を深めたり、自らの考えを広げたりする古典教材や学習の手引きが充実している。	C 読むこと 古文・漢文について、的確に捉え、理解を深めるための教材が充実している。	「実践」や教材ごとの手引きで主体的対話的で深い学びを実践する数多くの言語活動例が示され、十分配慮されている。	・教材収録本数が多く、作品や作者のバリエーションも多岐にわたり、教材選択の幅が広い。	・脚注や系図・地図、脚問などが適宜掲げられており効果的である。	・意欲的に発掘された新教材が多く掲載されていて清新な印象を受けた。			
	(2) 古典などを読むことを通じて、我が国の文化の特質や中国など外国の文化との関係について理解を深めたり、文語や訓読のきまりについて理解を深めたり、現代に至る言葉の変化や影響について理解を深めるための古典教材が充実している。						・単元ごとに「単元の目標」が示され、単元を通しての学習の見通しが立つように工夫されている。	特に絵巻物、絵画などのカラー図版が時代・風俗を理解する際に有効である。	・巻末付録の「古語の理解」「漢語の理解」、年表などが授業に役立つ。
	(3) 先人のものの方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの方、感じ方、考え方を豊かにする読書について、十分配慮されている。							・教材ごとに「視点」が示されて、教材を通して学習の見通しが立つように工夫されている。	
				・教材ごとに「司会」と「表現」が示され、身につける資質・能力を明確である。					

「教科書調査の観点」のほか、シラバスなどの資料は、筑摩書房の教科書サイト「ちくまの教科書」からダウンロードできます。
<https://www.chikumashobo.co.jp/kyoukasho/>



特設サイト



ちくましょぼ
筑摩書房

〒111-8755 東京都台東区蔵前 2-5-3

●ご注文・見本の請求 営業部 / tel. 03(5687)2680
 ●内容に関するお問い合わせ 編集部 / tel. 03(5687)2674